

教育委員会会議の議事録（平成27年7月臨時会③）

◆ 日 時 平成27年7月29日（水曜日）午後2時

◆ 場 所 本庁舎2階 第1委員会室

◆ 出席委員 教育長 大越 裕光
教育長職務代理者 宮腰 英一
委員 永広 昌之
委員 草刈 美香子
委員 今野 克二
委員 齋藤 道子
委員 吉田 利弘

◆ 会議の概要

1 開 会 午後2時

2 議事録署名委員の指名 永 広 委 員

3 協 議 事 項

（1）平成28年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書の採択について

（教育指導課長・特別支援教育課長・教育センター指導主事 説明）

（※以下 A 者、B 者等の呼称と具体の発行者名との対応は、最終頁の「ABC対応表」のとおりです）

【国語】

教 育 長

それでは、協議を始める。

まず、最初に、国語について協議を行う。事務局から、学習指導要領における目標や選定協議会答申等について、ご説明をお願いします。

相澤指導主事

中学校「国語」について、説明する。

中学校「国語」では、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる」ことを目標としている。

選定協議会においてとりまとめた中学校「国語」の全発行者の特徴は、別紙資料1答申の「別紙1」の1ページにお示ししている。

選定協議会の答申にある選定協議会として推薦する発行者は、同じく「別紙1」1ページにあるA者とE者である。

選定の主な理由については、まず、A者は「1つの单元ごとに「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の言語活動がバランスよく配置されており、身に付けたい力が系統的、段階的に育つよう工夫されている。」ということである。

次に、E者は「「話すこと・聞くこと」や「書くこと」についての「練習」の部分の例示やモデル文が詳しく、豊富な構成であり、生徒にとって理解しやすいよう

工夫されている。」ということである。

教 育 長
永 広 委 員

ただ今の説明に対して、何かご質問はあるか。

各者の教科書を並べると同じ作品がかなり取り上げられていて、私が見た限りでは3年生まで合わせると7つの作品が5つの教科書会社すべてで取り上げられている。また、同じ作品が2、3者で取り上げられているというものがたくさんある。これは偶然なのか、それとも文部科学省の推薦図書等があるのか教えていただきたい。

相澤指導主事

文学的文章に関しては、例えば1年生「少年の日の思い出」、2年生「走れメロス」、3年生「故郷」というように定番的なものはあるが、特に学習指導要領等で決められているわけではない。

草 刈 委 員

選定協議会から2者推薦されているが、選定協議会の議事録を見ると、推薦されなかった3者、特にC者については、それほどマイナスのご意見がないようだったが、その辺についてお伺いしたい。

相澤指導主事

選定協議会では、C者は單元ごとの言語活動がバランスよく配置されていない、また、身につけたい力が系統的、段階的に育成するには課題があるという意見があった。

齋 藤 委 員

中学校の国語科において、漢文の取扱いはどのようになっているのか。

相澤指導主事

学習指導要領においては伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項の中では、特に古典について記載されているが、漢文については特に記載されていない。

今 野 委 員

選定協議会の議事録の中で、「主体的に」という言葉や「言語活動」という言葉が使われているが、今一つ理解できない。例えばA者とE者の違いでお伺いしたい。両者とも聞くこと、書くこと、読むこと、学習の見通しや目標が記載されているが、学校の授業では教科書を使うので、自主的にどんどん進めていくということとは少し違うような気がする。主体的とは自主的に勉強するという意味なのか、もう少し違いを明らかにしていただきたい。また、A者とE者について、単元を貫く言語活動の違いについてご説明いただきたい。

相澤指導主事

国語科における主体的については、学習指導要領解説国語編において、「教科の目標を達成するために言語能力は社会生活に生きて働くよう、一人一人の生徒が言語の主体的な使い手として、相手、目的や意図、多様な場面や状況などに応じて適切に表現したり、正確に理解したりする力として育成することが大切である」とされている。つまり、生徒が国語科の学習活動の中で言語活動を通して適切に表現したり、正確に理解したり出来ることが国語科の目標達成において大切なことと捉えられる。そういう意味で、教科書における言語活動の記述や学習の手引における課題、ポイントの記載が重要だということが言える。そういう意味において、この2者の違いとしては、A者は巻頭の部分で学習の見通しが持てるような工夫、それによって生徒が主体的に学習に取り組みやすいという構成であるということ、E者は手引の部分において学習するポイントが分かりやすく示されており、生徒が主体的に取り組みやすい工夫がされているということが違いとして挙げられた。

また、中学校国語科における単元を貫く言語活動については、文部科学省発行の言語活動の充実に関する指導事例集によると、「単元の重点指導事項を指導するのにふさわしい言語活動を選定し位置づけることで、育成すべき国語の能力を身につけるための指導過程、学習活動」と記載されている。この意味で、2者についてそれぞれ具体例を挙げると、A者は1年話すこと聞くこと領域においてことわざを用いたスピーチ活動を言語活動と位置づけ、言語能力の向上を意図している。E者は1年読むことにおいて段落同士の関係に着目し、文章の構成を捉え、続いて書くことについて記録の仕方を学び、最後に話すこと領域で学んだことを

生かして紹介スピーチを行うという三領域に関わる言語活動を位置づけた単元構成が該当するという部分が話し合われた。

教 育 長
齋 藤 委 員

他にご質問等なければ、各委員のご推薦を含めて、ご意見をいただきたい。

結論から言えば、E者を推薦したい。小学校とのつながりが非常によく分かること、それから、特に1年生、2年生の教科書には、それぞれ宮城県に関する内容が載っている。2年生の教科書には山元町のりんごラジオのことが載っている。そうしたところから、子どもたちが自分の身近なところと災害に対しての国語科の役目というものが広がっていくと思う。

もちろんA者も非常に素晴らしいと思う。また、C者は選定協議会から推薦はなかったが、私は非常によくできていると思う。特に巻末の資料編が充実していて、各学年とも差し込みの写真ページが古典につながっているところは非常に興味を引いた。

5者とも本当にボリュームがあつて素晴らしい内容だと思うが、私はE者を推したい。

草 刈 委 員

どの教科書にも冒頭の部分でさまざまな工夫を凝らしていて、特に現代文などの作品においてもいろいろ吟味されていて、本当に子どもたちのために一生懸命作っていただいているという感じがした。

本当に素晴らしい中で私が何を注目しようかと考えた時、詩や古典になかなか触れる機会がないというところで、そこを重点的に比較した。詩や古典に親しみを持っていただくことで、表現力や想像力を豊かになって欲しいという願いを込めている。

その中で一番効果的だと思ったのはC者である。「初恋」という詩は各者が取り上げているが、C者の3年生の150ページに載っている「初恋」は、イラストはもちろんのこと、作者の顔写真などもすべて次のページに持ってきて、見開きで言葉自体を十分楽しめるような工夫をしている。A者でも同じように「初恋」を扱っているが、見開きで見た時に、写真があるとどうしても写真の方に目が行ってしまう。C者はそうした細かい配慮をしていて、とても工夫している。また、古典については、1年生で特に「月を思う心」と題して「竹取物語」を取り上げていて、とてもいいと思った。

D者も工夫されている。古典について、1年生の107ページのサブタイトルのところに「100年後、1,000年後の友人であるあなたへ」というフレーズがある。これはとても斬新で、本当に古典を身近に感じさせるような、その世界に引き込んで想像力を膨らませてくれるようなフレーズである。

最後に「言葉の力」ということで、一番感激したのは、A者の3年生の184ページで取り上げている震災時の新聞社の報道についての文章である。これは体験として語り継ぐだけでなく、言葉の力の重みを実感して今後に生かせるものだと期待している。

それらを踏まえた上で、推薦したいのはA者である。

宮 腰 委 員

私は結論から申し上げますと、E者を1番、A者を2番に推薦したいと考えている。全体を見ると、先ほど永広委員からの質問にもあったように、同じ題材を取り上げている者がいくつかある。「走れメロス」は3者が取り上げているので、3者の比較をしたところ、B者については非常に短い冒頭の部分だけを取り上げている。それに比べてD者とE者は、2年生でそれぞれ十分な量を取り上げている。

特にE者はメロスの心境の変化をどう捉えるかという非常に重要なところを指摘している。また、「学習の窓」というものを各章に設けていて、この設定で問題を少し考えて、どういう場面が設定されているか考えてみようというものである。考えると同時に、それを今度は書き表してみようということで、感想文や内

容の要約等を書く形になっている。そうした非常に緻密な手法が1つの文章を取り上げても読み取る。他に取り上げている文章もいいと思う。特に読書案内を各者で取り上げているが、E者の読書案内の量が中学生にとって読むべき書籍をきちんと取り上げていて、非常にいいと思う。

A者について少し気になったのは脚注である。注書きが脚注に来ているわけではなく、最後にまとめられている。後ろを探さないと、注が出てこないの、少し読みにくくなっている。しかしながら、1年間通して聞く、書く、読むという構成については、A者は非常に工夫されていて使いやすく、先生にとっても教えやすくなっていると思った。

B者は、音楽の「イマジン」を荒井満さんが訳している。ポピュラーな音楽の翻訳は英語で教えるものとは少し異なり、そこには意味内容としての解釈を踏まえた翻訳がなされている。他の者では取り上げていないB者の特色であり、そういう面で非常にいいと思う。

C者は「学びの道しるべ」というものがあって、これが非常に良く、充実したものになっている。教える側にとっても生徒にとっても使いやすいものになっているので、この者の1つの工夫だと思った。ただ、全体としてC者は小説や論説文が他の者に比べて少ないという印象を持った。

永 広 委 員

5者とも何らかの形で小学校とのつながりを考慮した構成になっている。話すこと、聞くこと、書くこと、読むことという言語活動もすべての教科書がバランスよく配置していることが見て取れる。また、資料や巻末のまとめがいずれも優れていて、ウェブ情報の扱いについてもそれぞれ注記を設けている。

そうした中で、A者、D者、E者の3者がやや抜きん出ていると思う。この3者はいずれも豊富な読書推薦本があって、しかも人文学から科学融合、あるいはその他さまざまなジャンルのものを適切に取り上げており、子どもたちが自らいろいろな世界に入り込んでいく時の手引になると思う。

3者の違いについて、A者は、選定協議会の推薦にもあったとおり、ガイダンスから一貫して3年間の見通しをうまくつけていて、子どもたちにとっても扱いやすい教科書になっているという特徴がある。また、A者とE者が四季、季節の移り変わりや文学作品に対応させて季節感のある構成になっており、特にA者は扉の写真あるいは作品に添えた写真等できれいなカラーのもの、しかも、季節に対応したものをうまく配置して季節感をさらに盛り上げて子どもたちの興味を引くものになっていると思う。さらに、巻末の基礎編、資料編が充実しているという点も優れている部分である。ただ、宮腰委員の意見にもあったように文書の中で出てきた注記が資料編にまとめられているのは、やや使いにくい気がする。

D者は特に小学校とのつながりを重視していて、1年生から国語という学問に入り込んでいきやすくなっていると思う。D者のもう1つの特徴は、特に2年生、3年生で見られるものだが、図表や写真を用いて考える、あるいは読んだものから絵を起こしたりするという、映像を創作に取り入れて作品の理解を深めるという観点が特に重視されていて、他の者と違う面白い観点だと思う。

E者もA者と同じように学習の見通しがきちんと立っていて、巻末資料もたくさんものが挙げられていて、非常に奥行きのある教科書だと思う。もう一つの特徴は、齋藤委員の意見にもあったが、仙台や東北に関わる題材が極めて多く、例えば1年生の女川の中学生の文章、それから金華山の鹿、田沢湖のクニマスの記述、2年生の山元町の臨時災害放送局というように、仙台の子どもたちにとって非常に親しみやすい教科書になっている点が優れていると思う。

いろいろな特徴があるが、順位をつけるとすれば総合的に見て一番優れていたのがE者で、続いてA者、そしてD者の順である。

今野委員

どの教科書にも載っている「少年の日の思い出」で比較してみた。まずA者よりB者の方が字体が読みやすく、紙質もマット紙で目に優しい感じがした。漢字のルビ、ふりがなはA者やC者の方が多く親切な感じがした。C者は字が細かく1行の字数が多いような感じがする。新設漢字の欄ではE者の方が上の文章中の言葉を連動していて混乱しないように感じた。

古典の「竹取物語」もA者、B者、C者、E者に載っていたのでそれぞれ比較してみたが、色遣いやレイアウトはE者が印象に残り、興味を引くような文章だった。古典の横に現代語訳があって、下の方に現代語訳があるよりは親切だと感じた。

B者の内容は単純に古典の文章を読むということに留まらず、物語全体の解釈に及んでいる部分が中学校1年生にとっては少し難しいという感じはしたが、物語全体を捉えるという視点では他の教科書には見られない面白さもあると感じた。選定されている文章は興味深いものも多く、例えば向田邦子さんの「字のないはがき」や荒井満さんの「イマジン」、それから「ストロベリー・フィールドの風に吹かれながら」など、読者を引きつける文章とともに平和への思いが強く伝わってくる感じた。

D者は「道しるべ」として文章の重点やまとまりがあり、関連性のある本の紹介をしている点がいいと思った。

読んで面白いのはB者だが、教科書として選ぶということを考えると、私もE者で、2番目がA者である。

吉田委員

各委員がおっしゃっているように、例えば文学作品の取扱いについて緻密な内容で、各者に差はないと考えている。私の場合は英語と同様に、語学なので、その表現のあり方の視点から拝見した。話すこと、書くこと、それらがどのように編集されているのか、生徒たちにどのような影響を及ぼすのかという点で拝見した。そのような視点ですべての者を見て、候補になったのがD者、E者、A者の3者である。

D者については、1年生の巻頭の部分で小学校との関連を踏まえながら話すこと、書くことの基礎的なことに触れている。話す、聞く、書くことについては、多くの場面で扱っている。特にこのことがその分野に関する特設されたフォーラムと言っているが、1年生では6回、2年生では5回ということで、書くことについては重点的に触れているという印象である。しかも、内容についても必要な例文を示すなど、子どもたちにとって目標を持って取り組めるような編集内容だと思う。

E者は、話す、聞く、書くという特設コーナーをそれぞれ3か所から5か所ずつ設けていて、各学年で段階を踏んだ力をしっかり育てようという様子が窺える。さらに、それらのコーナーを充実させるために、その前のページに練習ページを設けており、学習に十分配慮しているという印象を受けた。また、巻頭において1年生では「声を届ける、書きとめる」というコーナー、2年生、3年生では「いつも気をつけよう、話すとき、書くとき」という言語活動に関する留意事項を的確に示しているという印象を受けた。

A者は、聞く、話す、書くということについては量、質とも十分な扱いをしていると思う。特に書くことについては、その分量の大半を表現の豊かさを求めて、段階もしっかり踏まえられているという印象である。内容としても、完成レベルのものを1つ、2つ示していて、そこに行き着くまでの取材や構成のあり方などをたしかなステップを踏んで分かりやすく子どもたちにメッセージを伝えているという印象である。また、E者と同じように、すべてではないが学びの扉というものを入れて、話す、聞く、書くということに対する学習への誘いが効果的になされている。

その他では、C者も書くことについては大変重視した内容になっている。

それらのことをトータルして、A者とE者が大変拮抗した状態であるが、特に各部分を比較してみたところ、簡潔明瞭で生徒たちに内容がよく分かりやすいように伝えているという印象を受けたのがA者だった。それを踏まえて、A者を推薦したい。

教 育 長 一通りご意見を伺った。各者おおむね全部取り上げていただいた。そうした中で、E者が4名、A者が2名という状況である。

草刈委員はA者を推薦しているが、E者については特にコメントがなかったが、E者についてのご意見はあるか。

草 刈 委 員 もちろんE者も大変バランスがとれた内容、作品を扱っていて、子どもたちにも学びやすい教科書だと思っている。特に「初恋」について、きちんとシンプルに取り上げていて、想像力を膨らませるような工夫がされている。また、俳句や古典などについては、不明なところにはきちんと説明を入れるなど必要なところには必要なものを入れて、必要でないところには特に何も入れないという姿勢もしっかりとしていると思うので、E者もすばらしいと思っている。

教 育 長 各委員の全体のご意見の中で、あらためてA者について新たなご意見はあるか。

草 刈 委 員 A者については、やはり3年生で取り上げている新聞記事で言葉の重みということで、本当にたった一言の言葉が多くの人々の心を勇気づけたり、また悲しませたりするという文章に非常に感銘を受けた。できれば子どもたちにも、そうした言葉一言で人を勇気づけたり、逆に悲しませたりするということを実感して欲しいと考えており、できれば仙台市の子どもたちにこれを読んで欲しいので、A者を推薦したが、もちろんE者でも構わない。

教 育 長 先ほど吉田委員はA者をご推薦いただいたが、特に2番手に関する意見はなかった。各委員からの推薦からするとA者とE者に絞られた状況になっているが、特にご意見あればお聞きしたい。

吉 田 委 員 表現するということがすべて聞くこと、読むことという力に大きく影響するという視点から、書く、話すということを重視しなければならないという考え方で見たが、そういう意味ではA者とE者が拮抗している。実際、選定協議会からもE者も推薦されているし、各委員からもE者を推薦するということなので、E者も活用の仕方子どもたちにとってよりよい教科書になると判断できると思う。

教 育 長 どうしても絞るためには、結果的に少なかったA者を推薦した吉田委員と草刈委員に再度ご意見を伺った。吉田委員はE者とA者は拮抗しているということで、E者もやぶさかでないということで理解してよいか。

吉 田 委 員 はい。

教 育 長 草刈委員に先ほどお聞きしたところでは、A者を推薦するというご意見はいただいたが、E者がいいという声も多く、その点ではいかがか。

草 刈 委 員 もちろん東日本大震災にも多く触れられているので、E者も子どもたちにとって立派な教科書だと思う。

教 育 長 A者、E者どちらも優れている教科書、推薦に値する教科書ということだが、一者に絞るというところで、E者に集約されてきた。E者というところで協議をまとめるといふことでよろしいか。

各 委 員 異議なし。

教 育 長 それでは、国語に関してはE者ということでまとめてさせていただく。

【書写】

教 育 長 次に、書写について協議を行う。事務局から、学習指導要領における目標や選定

協議会答申等について、ご説明をお願いします。

相澤指導主事

中学校「書写」について、説明する。

中学校「書写」では、学習指導要領において、「ア 文字を正しく整えて速く書くことができるようにするとともに、書写の能力を学習や生活に役立てる態度を育てるよう配慮すること。イ 硬筆及び毛筆を使用する書写の指導は各学年で行い、毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うようにすること。」と内容の取り扱いについて示している。

選定協議会においてとりまとめた中学校「書写」の全発行者の特徴は、別紙資料1 答申の「別紙1」の2ページにお示ししている。

選定協議会の答申にある選定協議会として推薦する発行者は、同じく「別紙1」2ページにあるD者とE者である。

選定の主な理由については、まず、D者は「「学習編」と「資料編」で構成され、学習した内容を学校生活や社会生活へ生かせるように工夫されている。」ということである。

次に、E者は「「生活に広げよう」や「しょしゃのたね」等に、願書の書き方や宅配便の宛名書きなど日常生活に応用できる学習内容が多く掲載されており、学習したことを生活に役立てようとする態度が育成されるよう工夫されている。」ということである。

教 育 長
今 野 委 員

ただ今の説明に対して、何かご質問はあるか。

E者の9ページにDマークということでデジタルコンテンツがあるが、他者にはないのか。また、これは評価の対象に入れなくていいと思うが、考え方について伺いたい。

相澤指導主事

E者のDマークに関しては、インターネットサイト、ホームページ上で筆の運筆等についての動画で掲載されてがある。その他の5者については、特に記載されていないかった。

教 育 長

Dマークが記載されていないことについては、指導上特に問題になるわけではないということでしょうか。

相澤指導主事
吉 田 委 員

そのとおりである。

小学校では書写のための専用ノートというものが準備されているが、中学校では専用ノートはどうなっているのか。また、常用漢字の行書体が載っている教科書と載っていない教科書がある。常用漢字が載っていないことについて、何か不都合があるのかどうか伺いたい。

相澤指導主事

専用ノートについては別にあるが、購入する、購入しないは学校の判断で決めている。常用漢字については、常用漢字表として記載がないことがあるが、使い勝手について選定協議会で具体的に話題にはならなかった。

教 育 長
相澤指導主事

常用漢字表の記載は必須になっているわけではないということか。

必ず書写において常用漢字表としての記載が必要だということは学習指導要領には記載されていない。ただし、国語に関して学習指導要領の伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項の中で、ウの文字に関する事項としてそれぞれの学年において学ぶべき漢字の数については指定がある。書写という部分についての記載はない。

齋 藤 委 員

教科書の大きさを見ると、E者が一番大きく、A者も普通よりも大きいサイズである。選定協議会でも、教科書の大きさについて話題になっていたが、教える立場として大きいサイズと普通のサイズとで、何か不都合があるのかどうか教えていただきたい。

相澤指導主事

教科書のサイズについては、選定協議会で、E者はA B判、D者は他者と一緒でB 5判となっているが、A B判は机で開いて学習する際に生徒が苦勞するのでは

ないかという意見が出ていた。一方、サイズと関わる部分では、大きいため内容が充実しているという特徴についても意見が出ていた。

教 育 長

教科書のサイズについては、決定的なものではないということである。

それでは、書写について皆様から推薦を含めてご意見を伺う。

永 広 委 員

先ほど常用漢字表については特に学習指導要領では触れられていないということだが、硬筆の練習をする時に楷書体、行書体の比較がある方が便利だと思う。そういう意味では、中学校までのすべての常用漢字の楷書体、行書体の両方を示している方が望ましいと思う。

選定協議会の評価はおそらく2か所間違っていると思う。例えば、A者については、選定協議会の答申では楷書と行書の両方あると記載されているが、私が見たところ行書体の常用漢字のみで楷書体はなかったような気がする。またC者については、小学校の楷書と行書だけがあると記載されているが、常用漢字全部があつて、ただし楷書体がないという構成だったと思う。B者については、小学校の楷書体、行書体だけで、中学校のものが挙げられていないという点で、このA者、B者、C者という3つの教科書はやや物足りない。

D者とE者については、小学校から中学校までのすべての常用漢字の楷書体と行書体をきちんと挙げていて、D者はそれらに対応させて表示をしていた。E者はさらに人名漢字表も載っているという特徴がある。

その他の点で見ると、例えばB者は硬筆の筆記具の持ち方を非常に分かりやすく示していて、その点ではE者も同様であった。やはり書く姿勢や筆記用具の持ち方というのは書写の基本なので、それをきちんと示しているということはいいことだと思う。

D者は、日常のさまざまな書式をたくさん挙げていて、実生活との結びつきという点で優れている。

E者は、手紙だけではなく、その他さまざまな日常生活に役立つ教材をたくさん取り入れていて、漢字の成り立ちや古典から学ぶという資料についても充実していた。先ほど教科書の大きさの議論があつたが、やはりE者の大判というのは文字を扱う教科書では余裕があつて、非常に見やすい中身になっていると思う。

全体を見るとD者、E者がやや他の3者に比べて優れていて、その中で順位をつけるとすれば、E者、D者の順である。

教 育 長

若干ご指摘があつたのは選定協議会の答申の記述について、答申としてはそのままであるが、教育委員会としては5者全体をあらためて見て採択するというにしているのので、選定協議会の答申を根拠にして決定しているわけではないのでご理解願いたい。

今 野 委 員

E者は、用具の発達から始まって、筆などの時代の変化が面白いと思う。文字を書くことと応用を非常に大切にしていると感じた。職場訪問をしよう、好きな言葉を書こう、防災訓練に参加しようということで、きれいに文字を書けることが応用編としていろいろなことにつながると感じたので、この点が非常にいいと思う。また、学習の初めにそれぞれの学年でこれから学ぶことが理解できて非常に親切だと感じた。それから、「目標を書こう」というものがあるが、これは大切なことである。スポーツ選手の中でも小学校などの子どもの頃の作文の中に「自分はこういうふうな人間になりたい」ということを書いて、それを実現している人がたくさんいる。そういう意味で、目標を書くということが定着すれば人生にとっていろいろなプラスになることがあるという意味で、目標を書こうというのがいいと感じた。

A者については、「身の回りの書き文字を探そう」からすぐ文字の書き方に入っており、毛筆で学習する人、すぐに練習する人にはいいと思うが、毛筆の部分が

多く、日常生活に即した内容が少ない。

D者については、字形の整え方、読みやすく書くためなど、小学校で学習したことも学べて、大切なことを再度確認していることがいいと思う。年齢的には、中学生の頃が文字をきれいに書けるようになる最後のチャンスだと思うので、ここでそういう復習があるというのは大変いいことだと思う。日常の書式のページが充実しており、実際の生活に応用できるようになっている。これも教科書に直接練習できるということもあり、その辺もいいと思う。

B者については、それぞれ「勉強した後、生活に活かそう」があり、実践的である。教科書に直接書き込んで練習ができる。

C者については、「目的に合わせて書こう」というものが分かりやすく、何のための勉強なのか理解できる。それぞれ勉強した後に、学習を活かして書くということで、B者と同じような構成で実践的である。これについても直接練習できるようになっている。

E者、D者の2者で迷ったが、「目標を書こう」というものが非常にいいと思うので、E者を推薦したい。

吉田委員

小学校は文字を覚えるということを重視するが、中学生になればその字を活かすということになると思うが、正しい鉛筆の持ち方や正しい姿勢というものをチェックするという観点で見ると、E者とB者がきちんとした触れ方をしている。

生活との関連ということでは、E者とB者がきちんと関連性を持たせた資料を提示するなど、その内容も豊富である。

ただ、中学校生活の中で書くということだけでも落ち着いて取り寄せたいという気持ちもある。そういう意味では、D者はそれほど資料が多くないが、とにかく書くということについて集中できるような編集内容になっている。

その辺を総合すると、やはり紙面の大きさになるが、いろいろな資料もあって、なぞって書くなど実際に書くという場面が多く保障されているE者が子どもたちにとってふさわしい教科書内容だと思う。したがってE者を推薦したい。

宮腰委員

結論から言うと、D者を1番、E者を2番に推薦したい。その理由については、D者もE者も非常に実用性を重視している。ここで学んだことを生活に実際に使おうという方向性がE者とD者にはよく見て取れる。ただ、吉田委員、今野委員がおっしゃったように、実用性を覚える前に、画数やはねる、とめる、そうしたきっちりした文字を書ける基礎基本ということを書写で学ぶということから考えると、D者が優れている。まずきれいな行書、楷書を覚えるということが第一だと考えているので、D者を1番とする。さらに、コラムも充実している。他の者も篆書、行書、草書という応用的な楷書、行書以外の応用的な文字についても掲載されているが、D者もきちんと取り上げているということもポイントの1つになると思う。

E者も非常にいいと思う。例えば唐の時代の4大派の文字は中学生では難しいと思うが、特に王羲之と蘭亭序も出ているので、中学校の3年間のうちに触れておくということはいいことだと思う。

B者についても、日本の空海という書の名手ということで、発展段階として風信帖も取り上げてあるので、これも非常に捨てがたいと思う。B者には、優れたものに触れて学んでもらいたいという意図が見受けられる。

先ほど教科書のサイズについての議論があったが、A者については半紙の大きさで、書き初めも載っているなので、実際の大きさでこれに書いてみようというところも1つの工夫と考えられる。しかも蘭亭序ということで王羲之などの優れた作品も掲載されており、こういったところも優れた点だと思う。つまりA者は手本になるところを担えるような作りになっている。つまり楷書、行書、仮名といっ

た全体の文字の構成を学ぶという手本的な教科書として、A者は非常に優れている。

ただ、中学校3年間できっちりとした文字を学ぶという観点からすると、D者を1番と推薦したい。

草刈委員

私も宮腰委員と同じようにD者を推薦する。目標にもあるように書写はやはり文字を正しく書くということが第一目標であり、D者は趣意書の中に書いているとおり、書く力を育てるという本当に分かりやすい目標を持って作っている。書く力に重点を置いていて、単元の目標もはっきりしていて分かりやすく、資料なども豊富で日常生活に役立つものがたくさん取り上げられている。もちろん一番大事な姿勢についても、しっかり取り上げている。

それから、もう1つの視点として、せっかくきちんと文字を学んだとすれば、正しい文字を活かす一番身近な場所としてノートのとり方が大事だと考え、その観点で拝見させていただいた。そういう意味で、B者が資料の中にノートのとり方が取り上げられる。資料なので、1年生のうちからでも学ぶことができる。E者も同じようにノートのとり方はあるが、3年生で取り上げているので、できれば早く学んでいただきたいと思った。

先ほどのD者については、残念ながらノートのとり方は載っていないが、レポートのきちんとした整理の仕方などをまとめているので、私はD者を推薦させていただきたい。

齋藤委員

どの者も本当に見ていてとても楽しかった。結論から言うと、D者が1番、E者が2番という形になる。

ただ、C者も非常にすばらしいと思った。ほとんど甲乙つけがたい内容なので、まず基本的なこととして用具ができるまでの観点、それから姿勢や筆の持ち方の観点、筆使い、点画や常用漢字などの観点で見っていくと、C者は用具ができるまでや姿勢や筆の持ち方、筆使いなどが非常に丁寧に記載されている。

A者に関しては、まるで専門書のようにあり、これは大人が読んでも非常に勉強になると思った。

B者は、内容としては細かくないのかもしれないが、非常にポイントポイントを押さえていると感じた。

全体的に見ていくと、毛筆も大事だが、硬筆のことも考えたいと思う。行書と楷書の書き方を見ていくと、E者、D者ともに楷書も行書も「あいうえお」、あるいは「いろはにほへと」を書いているが、D者は筆使いがきちんと書かれている。本当に甲乙つけがたいが、資料の内容や、常用漢字でも小学校までに習った漢字がD者の方には印がついていて配慮されているというところなど、本当に細かいところで見っていくとD者を1番に推薦したい。2番はE者である。

教育長

各委員からの推薦はD者が3名、E者が3名の状況である。なかなか甲乙つけがたい状況ではあるが、またあらためてこの2者に絞って協議したい。各委員からのご意見を聞いた結果として、あらためてご意見があれば願います。

永広委員

練習して習得した文字を活かす、生活に役立てるという点ではD者もE者もさまざまな試みをしていて、この点では甲乙つけがたい。最初の毛筆、硬筆の持ち方、基本的な姿勢という意味で、もちろんどちらも大きな図、写真を用いて取り上げているが、おそらく日常生活では毛筆よりも硬筆の方がはるかに持つ回数が多く、硬筆、特に鉛筆の持ち方をきちんと分かりやすく指導しているという意味では、E者の方がD者よりも優れている。D者はどちらかと言うと、毛筆中心で、そこに少し違いがあるという気がした。それ以外はあまり違いがなく、違うところを探そうとすると、E者の方には人名漢字表まで載っていたり、判が大きくて見やすいというくらいであり、本質的なことではないかもしれない。

今野委員

E者かD者か決めるのは、それぞれいい点があるので非常に難しい。小学校から習ってきた文字をきれいに書くためのコツは、D者がきちんと再確認している。この点は非常にいいと思う。全般的にどちらかと言われるとなかなか難しいが、最近の小学生、中学生というのはなかなか自分たちの目標や夢を持つのが難しい時代になっていると言われている。そうした中で、E者は夏休みの目標や新学期の目標というものを取り上げており、そうした目標を考えるということが非常に意義があるものだと感じている。我々もただ惰性で1年が過ぎることもあるが、中学校1年生、2年生、3年生と、それぞれ1年ごとに目標を持って学校生活を送ることに結びつくようなことがあれば、大変すばらしいと感じたので、E者を推薦したい。

吉田委員

E者を推薦した理由を確認させていただくと、まず1つ目は鉛筆の持ち方、基本的な姿で、悪い例を示していることである。人間というのは比較しないと分からないことがあるので、これもいい機会だと思う。それから、書を活用するというところで、教科書の大きさに関係すると思うが、それぞれの項目に必要な資料が載っている。D者は資料編にまとめているという違いがある。

それから、大きく考え方を決めたのは学習指導要領の3年生の扱いとして、身の回りの多様な文字に関心を持ち、効果的に文字を書くという項目がある。したがって、当然身の回りの文字に関心を持つが、最終的には書くことになる。そうした時に、E者は書く場面が保障されている教科書だと思った。

D者も捨てがたいのは、落ち着いて書だけには取り組ませたいという願いがある。そういう意味では1年生、2年生にとっては本当に適切な教科書だと感じているが、最後の3年生で分かれたところである。

宮腰委員

D者を1位に挙げた理由としては、文字を書く場合の基礎基本、楷書、行書というものもあるが、硬筆で書く文字についても書かれている。いいと思うのは「なぞろう」という項目である。例えば30ページに行書の練習のところで「なぞってみよう」というものがある。文字をなぞってみようというのは、非常に重要だと思う。初心者にとっては、何気なく漢字を習ってきたものもあるが、「なるほど、こういうふうに書くんだな」と書き方を覚える。他にコラムでも、なぞって練習できるというところがこの者の特徴である。まず中学校の段階できちんとした文字を書けるという点からすると、こういう配慮がされているD者がいいと判断している。

草刈委員

私はD者を推薦するか、E者を推薦するか随分悩んだ。吉田委員がおっしゃったように、E者はきちんと見せる工夫もされているので、特に1年生にとっては見るということも大事だと考えている。

ただ、持ち歩くのには少し大き目だと感じるころもあり、またどうしても文字自体を大事にして学んで欲しいという思いがあり、それが見えるのがD者だったのでD者を推薦したが、E者でも十分子どもたちにも伝わると考えている。

齋藤委員

私は変わらずD者を推したい。その理由としては、たしかに他の委員がE者の筆の持ち方や鉛筆の持ち方が非常に細かいとおっしゃっていたが、なぜイラストなのかと疑問に思う。私はあまりイラストを入れない方がいいと考えており、絵で書いて欲しくなかった。

それから、例えばE者の12ページとD者の6ページをご覧いただきたいが、E者は「一」を書く時に筆の写真が筆圧のことも考えて2枚載せているが、そこまでの写真は必要なく、一気に書くという気持ちで、私はD者の方の筆使いがいいと思った。

また、E者は用具ができるまでの内容が非常に事細かに書いているが、細かすぎると思う。そうしたものは、自分たちが調べてもいい部分ではないかという気がする。

あと、草刈委員と同じく、普通サイズの方が持ち運びがしやすく、見る時も見や

- すいということで、D者をそのまま推したい。
- 教 育 長 2回ほど皆様にご意見を確認して、D者とE者が拮抗していることに変わらない状況である。第3ラウンドに入っていく前に事務局に確認したいが、書写について学習指導要領上の一番求めているポイントについてあらためて説明していただきたい。
- 相澤指導主事 学習指導要領上での書写の指導事項に関して、3年間についてお答えする。
まず、中学校1年生は、字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解して、楷書で書くこと、漢字の行書の基礎的な書き方を理解して書くこと、
中学校2年生は、漢字の行書とそれに調和した仮名の書き方を理解して、読みやすく早く書くこと、目的や必要に応じて楷書または行書を選んで書くこと、
中学校3年生は、身の回りの多様な文字に関心を持ち、効果的に文字を書くこと、となっている。
- 教 育 長 D者もE者もおそらくその事項に当然沿っていて、どちらも優れた教科書だと思う。あらためて1者に絞らなければならないが、先ほど草刈委員はE者も悪くないがサイズが大き目で少し気になったということで、D者にしたということであった。学習指導要領上、教科書のサイズはあまり関係ないということである。
- 今 野 委 員 書写を教える先生は例えば毛筆が相当上手なのかお伺いしたい。
- 相澤指導主事 選定協議会の中で、書写についてあまり上手ではない先生方もいるという話が出ていた。当然教員免許取得に必要な単位として書写についても学んでいるが、それぞれ教員にも特徴があると思う。
- 教 育 長 基本的に書写の基礎基本はしっかり押さえていることが重要で、上手かどうかというのはあまり本質的なところではないと理解してよいか。上手にこしたことはないが、それが求められるわけではないと理解したが、それでよろしいか。
- 教育指導課長 そのとおりである。
- 今 野 委 員 時代の流れの中で、今後10年先を考えるとデジタルコンテンツというのは、相当出てくるものか。
- 教育指導課長 情報が入っていないのではっきりと申し上げることはできないが、現時点での傾向としては教科書そのものがデジタル教科書に移行していくという考えもあることから、デジタル化あるいはいろいろなところからダウンロードするというのを授業の中で活用していこうと予想される、というところまでしかお話しすることができない。
- 今 野 委 員 他の教科も含め、デジタルコンテンツを使った教科というのは書写以外にあるか。今まで協議した中では、なかったような気がする。
- 教育指導課長 今、教育センターのホームページにはデジタルコンテンツ関係の資料がたくさん入っている。例えば社会科、理科、例えば理科であれば実験の様子が短時間で見られるようになっており、そういった意味で言えばデジタルコンテンツというのはたくさん利用できる状況になっている。
- 教 育 長 デジタルコンテンツは今後もおそらく拡大していくと思われるが、教科書として扱われるかどうかはまだ国がはっきり示しているわけではないので、書写に関してもデジタルコンテンツの教科書という位置づけではない。あくまで具体的な冊子で学習していくということであり、デジタルコンテンツは書写に限らず、いろいろな各分野において補助教材的に活用されていくものである。本当に教科書がなくなる状況になるどうかは、今後の発展状況によるところが大きいと思う。仮にそういうことになると、児童生徒がタブレットを必ず持っているなど、教育環境の整備も大前提になっていくと思うので、教科書だけで決められる問題ではないと思う。
あらためてE者、D者それぞれ推薦する意見があり、それぞれ3名ずつに分かれている。それぞれの良さについてお話があり、また教科書の大きさの話もあった

が、教科書の大きさは学習指導要領上、特に大きな意味を持つわけではないことを確認した。学習指導要領の各学年それぞれの目標に沿った教科書かどうかあらためて確認していただき、その上でこちらでもいいとご意見を変更しても構わない方がいれば、ご意見いただきたい。

草刈委員

書写の時間は1、2年生は20時間、3年生は10時間と書いてあるが、この中で毛筆をする時間というのはどの程度なのか、それぞれ教えていただきたい。

相澤指導主事

学習指導要領上には毛筆、硬筆を分けて記載されていないので、合わせての時間になっている。

教育長

そうすると、学校ごと、先生ごとの判断でその時間数の割合は決めていいということか。

相澤指導主事

選定協議会の中で委員から出た話としては、仙台市・宮城県において書き初め展を行っており、その指導時間が教科書の指導時間以外に必要という話が出た。それについては各学校において時間はそれぞれ年間指導計画で決まっているので、何時間と明言はできないが、教科書以外の書写の活動も現実的には学習活動として必要という意見が出された。

草刈委員

そうすると、この教科書以外でも毛筆の時間をどこかで捻出して指導しなければならないということか。

相澤指導主事

ただいま申し上げた書き初め展に関しては、国語、書写の年間指導計画の時間内でその学年の生徒に教えるように、学校ごとに年間指導計画が決められている。例えば代表となった場合は、学校によっては教育課程以外の時間を使うこともあるが、一斉の指導に関してはその年間の授業時間内で行っている。

教育長

書写の時間を超えて毛筆の時間をやらなければならないという義務はないということなので、他の時間を使ってやろうとする学校は年間指導計画の時間の範囲内でやることはあると理解していいと思う。

齋藤委員

拮抗状態であり、意見の変更の可能性を確認したいが、いかがか。

齋藤委員

ますますD者を推したい。もちろんE者も本当に拮抗しているが、先ほど永広委員からそれぞれの部分が資料に満遍なく載っているという意見があったが、私は反対に資料はまとまっていた方が見やすいと感じていた。また、選定協議会でも資料がまとまっているのが使いやすいのではないかという意見も出ており、D者を推したい。

宮腰委員

齋藤委員の意見に私も同感である。まず1年生で楷書と仮名をきちんとやって、その後で行書も少し入る。そして、2年生になって行書と平仮名をバランスを考えて書き、3年生になってそれをまとめて実際に年賀状等で書いてみようという形になっている。さらに、先人の文字に学んでみようということで、歴史的な著名な書を学ぶようになっている。配列としても非常に良く、学習指導要領の趣旨にも沿っているし、無駄がないと思う。それをなぞってみるところから学ぶこともできるし、非常に無駄なく、生徒にとっても学びやすい形になっている。やはりD者の方がはるかに優れていると私は思う。

E者ももちろんいいが、実際の生活で使うというところが強調されていて、やはり1年生、2年生、3年生の実際の日常的な生活というのは必要だが、限られた時間内できちんとした文字について基礎から学ぶということは学校でしかできないと思うので、そういう意味でD者の方が優れていると判断した。

教育長

あらためてE者を推薦する委員の中で、何かご意見あれば伺いたい。

永広委員

D者とE者の違いは、D者が学習編、資料編にきちんと分かれていて、E者はその都度、中に資料が入っているという違いがあり、どちらがいいのかは考え方によるが、E者の構成を見るときちゃんと学年の進行に合わせている。例えば先ほどの学習指導要領との関係で、3年生になると効果的にどう使うかということが課題にな

っているが、E者の場合、3年生の中に入っている「何とかを書こう」というのはまさに効果的な表現の仕方ということで、学習指導要領のとおり書かれている。1年生は1年生で習ったものをどう文字にするかという形である。これは段階に応じて入っているのだから無駄に中に入っているわけではない。そうした配列は、どちらがどうか考え方の違いがあり、私はE者の方が学習段階に応じた実用という意味で優れていると思う。

もう一つ、よく見てみると教科書の厚さが全然違う。最後の常用漢字表を除いて資料編までのところで比べてみたが、D者が78ページ、E者は107ページあって、30ページぐらい違う。どこが違うのかというのはよく見ていないが、E者はいろいろなデータが多く、また説明が丁寧なので、その分スペースをとっているということだと思う。

おそらく書写の授業では教科書のすべてを使い切って授業するというのは時間数の問題もあってなかなかできないと思う。そういうことを考えると、例えば何か手紙を書こう、また何かを作ろうという時に、この教科書を参考資料として使う機会も多いのではないかと。そういう意味で、どちらにたくさん例が挙がっていて参考になるかということを見ると、D者もちろんたくさん例が入っているが、E者の方がよりページ数が多くたくさん例が入っているのだから、後で役に立つと思う。そういう意味で、E者という意見は変わらない。

吉田委員

私もE者で変わらないが、1年生、2年生のそれぞれの教科書を見比べてみた時に、視点を換えればいろいろな紙面が中に散らばっている資料等が邪魔だと感じた。落ち着いて取り組めるのは、D者だという印象になってきた。

しかしながら、3年生になった時に書く場面は一体どこなのか。学習指導要領を確かめると、1年生、2年生は20時間、3年生は10時間程度ということで、3年生は半分の時間だが、やはり10時間の学習活動がある。字の活用について知識を学ぶことはいいが、やはり書く場面だって必要だろうと思って見た時に、それが保障されていたのはE者である。そこが私にとっては決定的である。もし1年生、2年生の調子でD者も来てくれれば、D者でもいいと思う。

教育長

第3ラウンドのご意見をそれぞれ聞いて、なおそれぞれのいい点を主張していただいた。書写については拮抗状態が続いているので、一旦休憩をとり、休憩後に今後の対応について検討したい。

(休憩)

教育長

今、書写についていろいろ協議を続けてきたが、他の教科がまだ残っているので、一旦書写についてはここで保留させていただき、本日の協議が一通り終わった後に再度協議することとしたい。

各委員

異議なし。

【数学】

教育長

次に、数学について協議を行う。事務局から、学習指導要領における目標や選定協議会答申等について、ご説明をお願いします。

鵜沼指導主事

中学校「数学」について、説明する。

中学校「数学」では、「数学的活動を通して、数量や図形などに関する基礎的な概念や原理・法則についての理解を深め、数学的な表現や処理の仕方を習得し、事象を数理的に考察し表現する能力を高めるとともに、数学的活動の楽しさや数学のよさを実感し、それらを活用して考えたり判断したりしようとする態度を育て

る。」ことを目標としている。

選定協議会においてとりまとめた中学校「数学」の全発行者の特徴は、別紙資料1 答申の「別紙1」の9, 10ページにお示ししている。

選定協議会の答申にある選定協議会として推薦する発行者は、同じく「別紙1」9, 10ページにあるA者とD者とG者である。

選定の主な理由については、まず、A者は「各章とも、学習のはじめに学習課題が示され、「数学的活動(Q)」「例」「たしかめ」「問」「基本の問題」「章の問題」「もっと練習」「補充の問題」を設け、基礎基本の習得から応用・発展までの学びの段階に対応できるように工夫されている。」ということである。

次に、D者は「「たしかめ」「基本のたしかめ」「学習のまとめ」「たしかめの補充問題」「練習問題」をスモールステップで既習事項を確認したり、基礎的・基本的な技能を習得したりできるように配慮されている。」ということである。

次に、G者は「「章の扉」の身近な話題が、学びの必然性やストーリー性を考慮しながら提示されており、数学的活動の楽しさや数学のよさを感じることができるように配慮されている。」ということである。

教 育 長
今 野 委 員

ただ今の説明に対して、何かご質問はあるか。

E者のMathNaviブックというのは、どういうものか見当がつくが、B者のMathfulという言葉は今の中学生にとってすぐに意味が分かる言葉なのか。

鵜沼指導主事

E者のMathNaviブックについては、数学を学ぶ別冊だということが分かると思う。B者のMathfulに関してはあまり馴染みがないものなので、子どもたちにとっては一体何だろうか疑問を抱くと思う。B者独自の社会にリンクをというページを独自に作ったものであり、他の会社で言うと「数学の広場」のようなものを、数学に馴染みを見せるためにMathfulという言葉を使って表記されている。

教 育 長
鵜沼指導主事
草 刈 委 員

この言葉は造語なのか。

造語だと思う。

調査研究委員会の報告書の34ページについて、A者のところに「数学科の特質を生かした言語活動を取り入れることができる」という表現があるが、これはどういう意味なのか具体的に教えていただきたい。

鵜沼指導主事

数学的な特質を生かした言語活動とは、端的に言うと数式に表すことも言語活動になっている。他の教科ではいろいろな言葉の表現ということであるが、数学はまず式で表したり、グラフで表したり、表で表したりということが学習指導要領にも言語活動ということで位置づけられており、これが忠実に取り入れられているということである。

教 育 長
吉 田 委 員

質問がなければ、各者のご意見、推薦をお願いしたい。

各者とも生徒に数学への関心を高めるための工夫として、日常生活と結びつけているが、直接的な関連性を保っていくのは難しく、限界があると思う。数学は、数学的思考力を高めるための教科なので、教科書の中、数の世界の中で考えた方がいいという観点で、各者の教科書を拝見した。

そういう意味では、本当に各者とも内容は充実しており、その内容の違いからの差というものはなかなか見つけられない。そこで考えたのが編集のあり方である。例題があると同一ページ内にその解き方が書いてあるというのが大部分である。そうすると、子どもたちはせっかく例題について先生とともに、集団的思考を重ねながら数学的思考力を高めていくという場面にしていきたいが、目を落とすと教科書にすでに書いてある。そういうことに配慮している教科書が5者あった。その5者は考えている時に解き方が見えないようになっており、中でもA者、D者、E者の3者がいいと思う。A者、D者については各章の初めに絵や図を載せて、子どもたちが馴染めるように配慮しながら数学的な提案をしている。中でも

A者は、章の途中においても奇数ページを設けている。奇数ページというのはそこに例題があるが、その解の仕方は裏ページということで見えないという配慮がされている。E者は、必ず各章の2節目で奇数ページ設定という工夫をしていた。私はこういうページをもっと増やして欲しいと思っている。さらに、A者は、各学習場面の必要などところで小学校、中学校での既習事項に触れており、D者も同じように各章の初めの段階でまとめて学習のエッセンスを提示している。

その他、基礎学力や学力検査の問題Bを意識するわけではないが、A者はその辺を踏まえて各要所のところで活用問題を設けているし、D者も巻末で「考える力をアップしよう」というものを提案している。

そういうものを総合的に勘案した場合、A者かD者になるが、子どもにとっての印象などを踏まえると、私はA者を推薦したい。

齋藤委員

私も結論から言うと、A者を推したい。一番うれしかったのはA者の見開きに「数学の世界へようこそ」と、その後に言葉が書かれており、その辺りは数学を苦手とする者にとっては、1つずつやっていけばいいんだという気持ちに導いてくれることに、まずはほっとした。

それから、1年生でも2年生でも、きちんと算数の振り返りをしている。2年生では1年生の振り返り、3年生では学びのつながりとして1年生、2年生、3年生を通して系列的にきちんとまとめられている。1、2年生では算数の振り返り、2、3年生では補充の問題としてきちんと各問に対して習ったページを示しているのでもいいと思った。数学の苦手な子どもにとっては、まず自分がつまづいた時に、どのページで習ったのかということすら、探せないことがあると思う。数学が苦手な子どもにとって、ここを見れば書いてある、前のページをめくってみてくださいという導きを書いてあることは、非常に苦手意識を変えていけるきっかけになると思う。1つ解ければ、次に進むステップになっていくと、非常に丁寧に示されていると感じた。

どの者も巻末に、特にA者は数学の歴史や社会とつながる数学など読み物などもあり、非常に興味を引くものになっているので、これも数学を好きになるチャンスとして捉えていいと思う。

なお、D者もとてもいいと思ったので、2番目にD者を挙げたい。巻末の小学校算数のまとめという一覧表が見開きで9ページにわたって一まとめにしてあり、やはり数学が苦手な子どもには参考資料として一目で見られるのはありがたいと思う。

今野委員

1年生の教科書を比較してみて、A者とD者は新しい単元に入る前に小学校で学習した関連する内容を復習してから導入している。また、A者、G者、D者は重要な言葉を色分けして分かりやすく表現している。A者は教科書の角の部分を使って実際に折らせ、手を使って学習させるような工夫をしている。同じくA者は巻末問題編で基本となる内容をまとめ確かめ問題を置いている。

2年生について、A者は巻末に数学の歴史やパズル、社会とつながっているなど、実際に身近な問題を取り上げて興味を誘っている。また、最後の索引図も公式を載せて思い出せるようにしている。D者は章ごとに見出しがなく、各章が探しにくい。字体ははっきりとして読みやすく、レットトライのページでは次に学ぶことがどのように役立っているか、想像しやすくしている。G者の中のイラストが少し幼い感じで、一人一人の名前は必要ないと思う。巻末の「マイトライ」のページでは1ページ、2ページごとに一まとまりの問題を解く方法が分かりやすいと感じた。

3年生について、A者の数学のことばのページでは数学を使った豆知識や内容に興味を持たせる視点で数学の面白さを紹介している。A者は単に知識としての計

算や図形を学ばされるのではなく、実際の社会で使われることを想定し、数学の活用によってさまざまな知識が広がることを表現している。

E者の表紙には、千円札に載っている逆さ富士が大きく取り上げられている。あの景色はなかなか見られない景色であり、どのように興味を持たせるのに使っているのか、ちょっと関心を持って拝見した。A者では逆さ富士の数字を使って関連する学習があった。E者も富士山が日本一高いという紹介があり、これもいろいろと興味を持たせようとする内容かと思う。

それから、E者の別冊 MathNavi ブック、数学ノートの活用方法が書かれていて、興味を持つ内容だと思う。

B者については、この表紙を使わない限り Mathful という言葉は分からない言葉なので、もう少し分かりやすい言葉にしたほうが良いと感じた。

C者は振り返りページがあり、数学が得意でない子どもたちへの配慮がされていると感じた。

F者のクイックチャージや数学探検が数学の基礎から楽しさが感じられると思った。

以上のことを総合すると、私もA者を推薦したい。

草刈委員

どの教科書も中学校からのスタートを切れるようにきちんと工夫されている。中学校に入った途端、正負の数、自然数や絶対値など新しい言葉を次々に覚えなければならぬという子どもたちにとって、見やすく、振り返りがしやすいという点に注目して各者を拝見した。

その中で私が一番分かりやすいと感じたのはD者である。D者は色遣いがそれほど多くないが、色囲みがきちんとされていて後から見直す時に大切なポイントが一目ですぐ分かるようになっていることがとても良いと思う。

G者も同じように囲みがあって、見直す時にはとても分かりやすいと思ったが、少し色遣いが多過ぎてポイントが絞りにくい感じがした。

A者について、大変落ち着いた色合いですべての面において分かりやすいが、特に重要語句のみが太字にされて、マーカーが引けない子どもにとっては振り返りをするには少し大変だと思う。自分でマーカーなどをして学習しなさいという意味であまり色を使っていないのだろうと考えたが、やはり色囲いなどではっきりと示してあった方が後で振り返りしやすいと思った。

D者は、資料なども豊富で大変見やすく、学習のたしかめのようなものもあり、単元の振り返りなども大変深まりがあると思ったので、私はD者を推薦する。

永広委員

どの者も小学校からのつながりをきちんと考えており、各節あるいは各章ごとに基礎を固めつつ、基礎を身につけた上でさらに応用へ、数学的ないろいろな活動を考えた構成になっているので、いずれも教科書としては優れたものだと思う。

その上で少し目につくところを拾っていくと、A者は全体非常によくまとまっている教科書だと思う。1年生の時は小学校、あるいは2年生の時には1年生、3年生の時には1、2年生の振り返りをきちんとしているし、特に巻末の問題編で振り返りつつ基礎を固め、またさらに応用へ進んでいくということをきちんと行っている。また、巻末の課題編では社会や他の教科とのつながりを考えたいろいろなコラムを設けていて、数学からさらに外へ広がりをきちんと意識をした教科書だと思う。

B者も社会とのつながりをかなり意識していて、巻末の読み物も非常に豊富である。B者は、節のさらにその下のいろいろな区切りにも数字を用いて小さな見出しがきちんと分かるようになっている。一つ一つの項目が分かりやすい構成になっている。

C者は、最も小学校とのつながりをきちんと考えている。さらに、3年生では高

校へのかけ橋という部分も設けて、下から上への大きな流れの中で中学校の数学をどう学んでいくかということを考えている。また、共同学習、協力して学習するという視点を特に前面に出して、周辺の友達といろいろ話し合いながらレポートをまとめたり、あるいは発表するというアクティブラーニングの観点を重視している点はC者の特徴であり、優れている点だと思う。

D者も小学校とのつながりをかなり重視していて、いい構成になっているが、読んでみると文字が多いのか、文字の間隔の問題なのか、紙面に余裕がなくて非常に読みにくい感じがした。これは感覚の問題なので本質的なものではないが、そういう気がする。

E者は、最初のガイダンスが非常にしっかりしていて、最初の数学への入口というところではいい教科書になっていて、説明の図も非常に効果的なものを使っていると感じた。

F者も小学校とのつながりを重視しているし、各学年のつながりも重視している。先ほども紹介があったが、クイックチャージというページをたっぷりとして、このつながりをきちんと明らかにしている。巻末のチャレンジ編も非常に充実している。

G者も小学校とのつながりがきちんとしていて、生活とのつながりも意識して数学から外へという広がりを考えている。B者と同様に節のさらに下の区切りを明確にして、一つ一つの項目が分かりやすい中身になっている。

各者さまざまないい点があるが、非常にまとまった教科書であり、社会や他の教科との広がりも考えているという意味ではA者がこの中では抜きん出ている。次いでB者、C者、F者が並んでいると思うが、先ほどの共同学習という観点を強調しているという意味では、A者に次いでC者を推したい。

宮 腰 委 員

結論から言うと、私もA者を第一に推薦したい。「数学の世界へようこそ」ということで、基礎基本から入って、そしてきちんとその章を終えて振り返ってまとめようという構成になっている。その間には「いろいろ調べてみよう」ということも設けられており、これは次のステップを展開していく上で学ぶ順序として適切であると判断でき、そういう意味で非常に学びやすく使いやすいテキストになっている。各章に関連するパスカル、フェルマーなど、適宜その場に合ったふさわしい形で数学の歴史も想起させているので、子どもたちもそういうところから関心を持てるようになっている。ユークリッドというところも図形から入って工夫している。数学の歴史的な、あるいは今日までの発展過程も子どもたちが迎えられるところが非常に優れている。

B者、C者は非常に他の教科との関係性に配慮している。B者については、音楽と数学、言葉と数学、アートと数というところで、非常に教科横断的、他の教科でも数学的な知識というものも必要である、あるいは他の教科にも応用されているという形で読めるので、数学だけでは挫折しがちなところもあるが、他の教科との関連性からまた数学を学ぼうということを意識して工夫している。

C者については、ピタゴラス等をうまく使っていて、音楽の音階をピタゴラスが工夫して発見したことなどが記載されている。こういうことが特に3年生の教科書に顕著に認められる。音楽のみならず美術的な面でも、空間図形と建築物などをうまく組み合わせて、特に1年生の教科書にそれが顕著に表れている。そういう意味でも非常に数学を日常的な観点から導入していて、これも生徒に興味を持たせる1つの工夫として優れている。

D者については、「何々を学習する前に」と前に習ったことのおさらいがあって、それから導入されていて、同時に中学校で何を学ぶか整理して、高校へのつなぎに持っていくということが1つの工夫として優れている。

E者は、教科書を読む上で難易度の問題もあって、基礎の理解がきちんとできるのかと少し疑問に思ったところもある。

F者については、数学の探究という項目があって、そこでいろいろと日常的な黄金率の問題などを身近な問題としている。巻末の探求というものが数学的な知見がどう日常的に反映されているかということを理解する上で、他者に比べて非常に工夫されている。

G者も非常に配置が工夫されている。特に数学研究室というものがあり、ここがいろいろな他教科との関連性というものも学べるということで、非常に優れた教科書として2番目に推薦したい。他にも和算の歴史や生活への活用のところにも配慮があったので、理解しやすいと考えている。

以上のようなことから、まずA者が第一候補で、G者を第二候補に挙げたい。

教 育 長

今一通りお聞きした結果、A者が5名、D者が1名であった。A者に関しては非常に高評価だったが、各委員の意見をお聞きして草刈委員はいかがか。

草 刈 委 員

先ほど申し上げたようにA者もきちんとまとめて、語句なども分かりやすく、基礎基本から、さらにどんどん進みたいという子どもにとって発展させる課題を豊富に取り上げているので、すべての子どもたちに適していると考えているので、A者はとてもいいと思う。

教 育 長

あらためて協議のまとめとしてはA者で構わないということによろしいか。

草 刈 委 員

はい。

教 育 長

A者に関しては学びやすい、また振り返りがしやすいなどのご意見が多く出された。数学に関してはA者ということでもまとめてまいりたいが、よろしいか。

各 委 員

異議なし。

教 育 長

それでは、数学はA者ということにさせていただきます。

【理科】

教 育 長

次に、理科について協議を行う。事務局から、学習指導要領における目標や選定協議会答申等について、ご説明をお願いします。

青木指導主事

中学校「理科」について、説明いたします。

中学校「理科」では、「自然の事物・現象に進んでかわり、目的意識をもって観察、実験などを行い、科学的に探究する能力の基礎と態度を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を深め、科学的な見方や考え方を養う。」ことを目標としている。

選定協議会においてとりまとめた中学校「理科」の全発行者の特徴は、別紙資料1答申の「別紙1」の11ページにお示ししている。

選定協議会の答申にある選定協議会として推薦する発行者は、同じく「別紙1」11ページにある、A者とC者とE者である。

選定の主な理由については、まず、A者は「単元配列が、仙台版スタンダードカリキュラムで示している指導計画に基づいた順番になっているので、生徒にとって分かりやすい構成になっている。」ということである。

次に、C者は「1年生の教科書の冒頭に『理科の学習の進め方』が詳しく掲載されていて理科を学ぶ意義を理解できるような工夫がされている。」

最後に、E者は「各単元に『じっくり取り組もう』という実験があり、理科の楽しさや奥深さを考えさせる構成になっている。」ということである。

教 育 長

ただ今の説明に対して、何かご質問はあるか。

草 刈 委 員

理科という名前ではない教科書が何者かあるが、それはどう捉えればいいのか。

青木指導主事

選定協議会の中でも、閲覧中にそのような意見があったが、理科、科学、サイエ

ンスなどの言葉を使っていることに関しては、特に学習指導要領上の規定にない。趣旨書等にもそういう説明はなく、理科という名称でなくても特段問題ない。

永 広 委 員

すべての者の評価の中に仙台市版スタンダードカリキュラムに沿っているか沿っていないかということについて触れられていて、ただ今の説明だとカリキュラムに沿っていることがプラスの評価となり、しかもいくつかの評価の中で特に取り上げられたので非常に高く評価されているように聞こえた。先日の他の教科ではスタンダードカリキュラムであるかどうかについては、ほとんど問題にされていなかったような気がするが、なぜこの理科だけが各者の評価に非常に強く取り入れられたのか。仙台市版スタンダードカリキュラムを作成した時に、カリキュラムの配慮というようなものを決めたとするが、その時の考え方についてご説明いただきたい。

青木指導主事

1点目の配列の評価に関して、選定協議会で話題になったが、専門委員会の中ではあまり議論の対象にはならなかった。選定協議会で出ている具体的な評価というのは、例えばA者、E者はその配列になっていて、他の者については分野ごとのまとまりになっているということである。そうすると、初めに1ページからスタートするわけではなく、途中からスタートし、また戻って、また後ろに行ってまた前に戻るということになってしまうことが、生徒にとって分かりにくいのではないかと、選定協議会で議論になった。

2つ目の仙台市版スタンダードカリキュラムについて、まず現行の学習指導要領では地域の特性などを生かして学習することができるようにするために、学習内容の順序に関する規定は設けられておらず、各学校の裁量になっている。そこで、各学校では、例えば植物教材などは春から夏にかけて入手しやすく、観察しやすいということを考えて、光の学習などは暗幕を閉めて実験等を行うことが考えられるので涼しい時期などを選んだり、あるいは1年生から3年生までの学習内容を考えて理科室の使用が重ならないようにしたり、あるいは身近な物質を扱う化学を物理の先に持ってきたりということを考えて、指導計画を作成している。仙台市版スタンダードカリキュラムを作成する上でも、こうした年間指導計画の参考として、今ご説明したようなことを考えながら計画例を示している。

今 野 委 員

仙台市版スタンダードカリキュラムに関して、全国各地でそれぞれのスタンダードがあって、それが相当違うものになっているのか、あるいはほとんど同じようなものになっているのか。例えば全国的に違えば、仙台市標準学力検査などでハンデになることがあるのではないかと思った。また、転校した場合にマイナス面はどの程度あるのか。

青木指導主事

住む地域によって、寒冷地と温暖な地域とでは、生物の教材等での扱いが変わってくる。学習する順番の規定はないので、各地域によって適した指導計画を作成しているということになる。

進み具合については、1年間で学習する内容については変わらないので、影響はないと思う。ただ、転校すれば、どういう順番でも進み具合の影響は、多少なりともあると思う。

教 育 長

若干補足的すると、要は地域特性に応じてカリキュラムは工夫されているので、仙台版と他地域と必ずしも同じではない。また、標準学力検査は前年の学年のまとめを4月に実施するので、学年の途中ということでのハンデはないということである。

青木指導主事

追加説明になるが、スタンダードカリキュラムというのは委員を募って年間の指導計画の参考として示しているもので、学校によっては理科室の使い方などもあるので、あくまでスタンダードカリキュラムは参考であり、各学校の裁量で決めている。仙台市が学校の参考のために作っているものであり、各都市で必ず作っているものではない。

齋藤委員

今の質問に関連するが、選定協議会でははっきり分野別とスタンダードカリキュラムという形で分かれて回答している。調査研究委員会としては特に問題はなかったという説明であったが、そこをもう1度確認したい。

また、選定協議会の議事録を見ると、学びの順とあるが、これは指導する順ということか、それがイコール仙台版スタンダードカリキュラムになっていると理解してよいか。

青木指導主事

専門委員会の中では評価の良し悪しという議論は一切なかった。各者の特徴を分析していたということである。

学びの順というのは、指導順と考えていただいて結構である。それが仙台版スタンダードカリキュラムの順番と捉えていただきたい。

草刈委員

別紙資料2の調査委員会報告書の44ページのA者について、自然現象についての知識・理解というところで、「単元末ではPISA型読解力を要する問題が配置され」という表現について説明していただきたい。また、それはどういう効果があるのか教えていただきたい。

青木指導主事

A者は、PISA型読解力という言葉を用いているが、各者は活用・応用問題という形で、言葉の違いはあるにせよ、各者が扱っている。狙いは思考力、判断力、表現力の育成というところと日常生活への活用する力を見る問題と捉えていただきたい。

教育長
宮腰委員

他に質問がなければ、ご推薦を含めてご意見を伺いたい。

結論から言うと、E者を推薦したい。2番目は僅差で、D者かC者を考えている。ただ、ほとんど大差はなく、植生や気候という点で、3者とも仙台の地域性を考慮して、工夫していると思う。

E者については、学習の目的・分析が非常に丁寧にまとめていて、授業に入る前のピフオーと終わってからのアフターの間の目的、結果、観察、研究、分析するという、その流れがきちんと整理されている。これがどの分野でも共通しているE者の優れた点である。そういう意味で、きちんとそれぞれの分野の学習の内容が整理されており、生徒にとっても理解しやすくパッケージ化されていると感じた。

A者も同じく仙台市版スタンダードカリキュラムを取り入れているが、順序性からすると非常に仙台の生徒にとって使いやすくなっていると思う。次への展開や発展性という観点からすると、A者よりE者の方が優れていると思う。

C者は各学年末に総合問題ということで整理されている。その前に各分野ごとの要点の整理と問題による内容の確認がされているので、生徒自身が自分の学びについて振り返って、それを総合的に整理することができる仕組みになっている。

D者についても、各学年の総合的な整理と3学年で学んだ理科分野の総合問題による自己点検と整理ということでも優れているが、総合的に見てE者を推薦する。

草刈委員

すべての教科書において本当に工夫が見られ、身近な問題から科学の興味や関心を深められるようになっている。本当にわくわくしながら、すべての教科書を拝見した。

まず目についたのは、科学にとって一番大事な実験に関する注意や応急処置で、そういうものの表現について比較した。一番丁寧で見やすかったのはE者である。E者はそうしたことを巻頭にしっかりと載せていて、安全・安心して学習に臨めるという気がした。A者においても、巻末にきちんとまとめてそれらを載せている。

もう1つのポイントとして東日本大震災に注目して、すべての教科書を比較してみた。来年中学校1年生になる子どもたちは、当時小学校の低学年で怖い思いだけしか残っていないかもしれないが、中学生になって正しく学習し、それを正し

く理解して、後世に残して伝えていっていただきたいという願いがある。そうした学習ができるのは、私はA者だと思う。A者は津波だけでなく、地殻変動などにも幅広く詳しく学べるようになっていく。C者は唯一東日本大震災という視点の言葉を扱っている。一般的に東日本大震災という言葉が広まっている以上、科学で言う東北地方太平洋沖地震となぜ名称が違うのか、はっきり示すことも科学にとって意識を深めるためにも大切なポイントだと思う。このことは教科書に載っていないけれども、きちんと伝えていただきたい。我々大人もそうした認識がなく、永広委員に教えていただいてようやく分かったので、子どもにはしっかりと認識してもらいたいという思いがある。

それらを踏まえて、私はA者を推薦したい。

齋藤委員

私はE者を推したい。どの者も非常に興味深く、一気に読ませていただいた。これらの教科書を使って学ぶ子どもたちは非常に幸せだと感じた。

E者は、地震の揺れの広がりや痕跡を探る、「科学でGO!」で防災対策ということで地震から建物を守るということが載っており、東日本大震災後の段階として一生懸命頑張っていると感じた。

B者、D者においては、仙台平野の津波堆積物等も非常に詳しく書かれていたもので、これも非常にポイントとしては面白いと思った。

C者は写真の配列が良く、文字も見やすいと感じた。ただ、先ほども質問したように仙台市版スタンダードカリキュラムと分野とが、どのあたりでいいものなのかどうなのかと考えてしまうが、非常にきれいに出来ているので、興味を引くと思う。

A者は、各学年とも巻末に「課題研究、自由研究にチャレンジしよう」というものがあり、「何々してみよう」という気持ちを促して、やる気を起こすきっかけづくりをしていると感じた。

ただ、全体的に見ると、E者は基礎操作が見やすく、最終ページの方に「未来への宿題」として投げかけをしてくれているというところが、科学を学びたい、もっと知りたいという気持ちを育てると思う。また、最後の資料の部分に、46億年を1年に見立てている表がある。その資料のコメントに「今の私たちの暮らしは多くのさまざまな生物と地球が共同して長い年月をかけて作り上げてきた大地の上にあること」ということを、きちんと分かって地球を大切にしようという気持ちを養うのではないかと感じ、全体的に見てE者を推薦したい。

吉田委員

理科という教科で分量も内容もこれほど豊かになってくると、小学校からの橋渡ししが重要であり、その点については各者十分に配慮されているという印象を受けている。また、実験を行う上での器具の扱い方として、基本操作的な名称を使いながら、これもしっかり触れている。

さらに、以前の教科書にあった使用中に塩素系洗浄剤と酸性の洗浄剤の問題については、すべての教科書においてきちんと注意事項としてコーナーが設けられていた。

中学生になると、実験結果等をレポート等にまとめるということを大切にしていかなければならないが、その点についてはC者が非常に丁寧な扱い方をしていて、子どもたちにも分かりやすいという印象を受けた。

理科の教科性を考えた時に、教科の目標である科学的な見方・考え方というものを大事にしていかなければならない。そうしたことを考えると、観察・実験のあり方が重要であり、そうした視点で教科書をさらに拝見したところ、子どもたちが科学を考えながら取り組めるようになっていくと思ったのが、D者とE者だった。

D者については、観察・実験の結果や考察のあり方のところにワークシート的な

表などが準備されていない。準備されていないが故に、明快な分析視点を設けているという印象を受けた。さらに、観察・実験を進める上での図解が非常に簡潔で分かりやすく、かつ細かな配慮がされているという印象を受けた。

E者については、同じく教科書の中にはワークシートのものはないが、平易な言葉でまとめ方、考察について問いかけされているのが特徴である。特に考察の仕方について、かなり力点を置いているという印象を受けた。それは、各学年の観点にチャート的な推論の仕方についての考察の仕方というようなコーナーを設けていると同時に、数こそ少ないが各学年で観察・実験した後には考察のあり方についての例示をしているためである。

D者とE者にあまり違いはないが、仙台市版スタンダードカリキュラムがあると多くの学校がそれに準じて年間指導計画を作ると思う。そうした時に、子どもたちが順序よく学びが進められるということからすると、それに準じた編集がされているE者がふさわしいと思うので、E者を推薦したい。

今野委員

小学校の時に理科と言って、高校になると生物、化学、物理、地学と分かれていくが、だんだんレベルが上がっていくイメージという感じからすると、中学校で科学という言葉の方がいいと思う。E者とB者が科学という言葉を使っている。サイエンスという言葉になると、もう少し専門的なニュアンスを感じるので、小学校、中学校、高校とレベルが上がっていくという意味では科学という言葉を使うとしっくりするという印象である。

それぞれ細分化された分野があるが、E者とA者とD者は、生物の最初に春花が咲き始める季節に非常に興味を持てる内容になっていていいと思う。

C者とE者は、宮城県あるいは仙台に関連するものが載っており、特にC者は東日本大震災ということで、生徒にとっては客観的に理解することができるということで非常にいいと思う。

E者は、1年生の218ページに岩手・宮城内陸地震の写真が出ている。また、227ページに東北地方太平洋沖地震の説明があり、なじみ深いということで、仙台の子どもにはE者もいいと思う。

B者は、非常にインパクトのある写真が多く、單元ごとに学習の確認ができて、知識を深められるように構成されていると感じた。

D者は、マイノートによってより学習した内容が定着するように工夫されている。

C者とA者は、さまざまな機械やプラスチックが実際の生活の中でどのように使われているか分かりやすく表現されていて、いいと思う。

私が中学校時代に戻ったつもりで考えてみると、学校の試験の時には教科書の順番どおりに勉強したいと思う。途中で飛んで学習すると、試験の時に勉強するのを抜かしてしまったということも出てくるような感じがするので、生徒としては順番どおり使える教科書の方がいいと思う。そういう意味でも私もE者を推薦したい。

永広委員

すべての教科書を見た時に、まず最初に全般的な導入部分を設けていて、程度の差はあるが、それぞれの安全についての配慮されている。その後、実際の観察や実験に入っていくが、例えば植物関係というところでは植物関係の前書きがまずあり、実験のやり方あるいは注意事項に関する記述があるという構成になっている。

すべての教科書がほぼ同じような構成になっていて、それぞれの分野ごとにそれぞれの導入があり、まとめがある。そういう意味では仙台市版スタンダードカリキュラム順かどうかは、ほとんど問題にはならないだろうと私は考えている。教える順番が飛んだとしてもそれは單元ごとであり、單元の中が入れ違っているわけではなく、それぞれの単元の積み上げにもなっていない。つまり、第一の単元の中身を理解しないと、第二の単元が分からないという構成にはなっていない。

教科書の使い方は自由にできるという構成にすべての者がなっているのに、仙台市版スタンダードカリキュラムの順になっているかどうかは、私は一切評価の基準にはしなかった。

それから、私の専門分野が一部あるので、1年の大地のつくりの最後を詳しく見たが、不正確な表現、間違った表現が結構ある。例えば地震・津波のところでは、地震による地殻変動の結果の大地の変化なのか、それとも津波の結果なのかということが十分区別されていないところがたくさんあった。また、化石のところではアンモナイトは中生代に栄えたというところまでは許容してもいいが、中生代の示準化石だと言われると、アンモナイトは古生代の半ばから現れて実は繁栄していたので、それは間違った答えになる。実際だいぶ前に、宮城県の高校入試の正答がアンモナイトは中生代の示準化石ということになっていたが、これは明らかに間違いである。そういう教科書もあるが、そういうものを挙げていくと実は非常に多岐にわたっていて、それはどの教科書にもあったので、基本的には評価の対象にはしなかった。

A者は、最初のガイダンスが非常にきちんとしている。基本操作に絡むようなことは非常に詳しく取り上げられていて、必要なところは本文中にも取り上げられている。実験というものを考えた時に、きちんとした実験、正しい実験、安全な実験という点で基礎的な事項は極めて重要だと思う。実験方法も分かりやすく図や写真が用いられている。そういう点で非常に基本がよくできている。それから、本文中には興味深いトピックが多数取り上げられている点で子どもたちの興味を引くと思う。先ほど評価しないと言ったが、A者の教科書が震災の部分などを除くと、どちらかと言うと比較的正確な記述を心がけている方だと思う。そういう意味で、かなり評価できる教科書である。

B者も、非常に基本的なところがよく出来ていて、基本操作、レポート作成等の説明も丁寧で、実験・観察のやり方もたくさんの図を用いて分かりやすい。各単元の末に「科学を仕事に活かす」というページがあり、その分野の科学がどう社会と結びついて役立っているか紹介されていて、非常にいい教科書である。ただ、左側のページの右寄りに図や表が頻繁に出てきて、両側のページの文字が切り離されて、見た時に結構見にくいページがある。

C者も、最初のガイダンスは非常に充実しているし、基礎的な部分も非常によく出来ている。各単元末の要点と重要用語の整理というのが非常によくまとまっていて使いやすい教科書だと思う。ただ、すべての分野ではないが、実験に用いる図や写真の色がブルー系統のかなり淡い色を多用していたり、背景にブルーを多用していて、かなり見にくいところがあるので、この辺は改良すべき点だと思う。

D者は、非常に巻末資料が充実して、單元ごとに実験のやり方・注意あるいは基本的な操作が充実している。ただ、部分的に写真や図の色がかなり濃くて、写真の中身が読み取りにくいところがあったので、その辺は改良すべき点だと思う。

E者は、最初のガイダンスが非常に充実していて、安全の配慮もされている。実験・観察等の基本操作の図が非常に大きくて分かりやすい構成になっていて、いろいろなところに図や写真が入っていて、非常にメリハリがある生き生きしたページになっている。また、たくさんのコラム記事が中に載っていて、これも非常に面白く、単元末の資料も充実している。小さなことだが、この者だけが例えば1年の大地の変化、それから3年の自然の恵みと災害の扉のページに、小さな文字で「ご担当の先生、保護者の皆様へ」ということで、災害の写真を扱っているので配慮してくださいという記載がある。私が見たところではこの者だけであり、かなり細かな心遣いがされた教科書だと思う。

以上のようなことを総合すると、基本がきちんと出来ていて非常にメリハリがあるということで、E者を推薦したい。次いでA者の教科書も非常に基本がしっかりしているし、記載もかなり正確さを心がけているので、推薦すべきだと思う。

教育長 E者をご推薦される委員が5名いて、あとA者が1名という状況である。E者、A者に絞られてくるが、各委員のご意見を聞いてA者を推薦した草刈委員はいかがか。

草刈委員 E者は写真を多用していてとても見やすく、いろいろなところに配慮をしていて、細かいところも見やすく、とてもすばらしい教科書だと思っているので、十分E者でいいと思う。A者とE者を水溶液のところを比べた時に、E者の方はきちんと質量についての記述があるが、A者の方には質量について全くコメントがない。その中で実験後には質量も同じであるという表現を使っていたので、これは私も少し気になっていた。やはり正しい実験をして正しく理解してもらうためには、E者の方できちんと学んでいただきたいと思う。

教育長 草刈委員 草刈委員 教育長 教育長 各委員 教育長

そういう点では、E者でも結構だということによろしいか。

はい。

そうすると、全員がE者ということになるので、協議の結果、E者ということによろしいか。

異議なし。

それでは、理科に関してはE者ということでまとめてさせていただく。

【特別支援】

教育長 それでは引き続き、特別支援学校・特別支援学級で使用される一般図書・文部科学省著作教科書について、説明をお願いします。

特別支援教育課長 特別支援教育において、検定済教科用図書を使うことが適さない場合に使う学校教育法附則第9条による一般図書と、文部科学省著作教科書☆本について、協議をお願いします。

まず、一般図書である。これは市販されている数多くの子ども向けの図書のうち、特別支援教育の教科用図書として使うのに適切であると宮城県教育委員会から示されたリストと、それに子ども特別支援教育課が市独自本として選んだ図書を加えたものについてご協議いただく。それは大まかに3つ、すなわち新たに加えるもの、継続して使うもの、採択をとりやめて不採択とするもの、この3つに分けられる。それぞれについてご説明する。

まず、新たに加えるものであるが、選定協議会の答申別紙資料1の別紙2の1ページをご覧ください。選定協議会から新規採択候補として小学部・小学校用3冊、中学部・中学校用を9冊、計12冊が適切であるとの答申を受けた。この表の見方であるが、上の項目にある「種目」という用語は「教科」と同じ意味で使われている。また、番号の欄において、アルファベットで示しているのは仙台市が独自に選定した図書、数字で示しているのは宮城県で選定した図書であることを表している。

次に、継続して使うものは、継続採択候補として、小学部・小学校用は2ページから5ページにかけて88冊、中学部・中学校用は6ページと7ページに45冊が挙げられている。

採択をとりやめるものについては、8ページをご覧ください。これには2種類ある。上段には昨年まで採択していた一般図書のうち、今回、品切れで増刷予定のないものや絶版となったものであり、物理的に供給できないため不採択となる図書が4冊、下段には内容が古くなっていたり不適切な用語が一部含まれるなどの理由から不採択候補となる4冊が挙げられている。

次に、9ページをご覧いただきたい。文部科学省著作教科書☆本については、☆が4つについている本は中学部用であるが、中学校・中学部用としてこれまでと内容に全く変更がないことから、継続して採択することが適切であるとの答申を受けている。

次に新規、継続、不採択の候補について、選定理由を述べる。選定理由は、別紙資料3に詳しく記載されている。別紙資料3は調査研究委員会報告書と専門員報告書で構成されている。選定協議会では、これらも参考にしながら協議を行った。ここでは調査研究委員会報告書を使ってご説明する。

(1)の1ページをお開きいただきたい。小学部・小学校用の新規採択候補本のうち、採択に適しているとの意見があった3冊である。この報告書は、書名の右の欄に、対象としてどの学年の子どもたちに適しているか◎○などの記号で表している。

一番上の種目生活 番号17の「イラスト版 発達に遅れのある子どもと学ぶ性のはなし」は、高学年の児童生徒を対象として、所見欄には「発達段階に応じて性の知識や仕組みについて、保護者とも連携しながら分かりやすく指導できる」などの評価が書かれている。

算数 AF番の「さんすうサウルス」は中学年・高学年を対象を対象として、「キャラクターや絵が工夫されていて、子どもが算数の概念や四則計算などに興味関心が持てる」、

図画工作 61番の「絵がうまくなる本 5・6歳対象」は低学年・中学年を対象として「子どもが意欲的に表現活動に取り組めることに加えて、文字の習得につながり、活用の幅が広がる」など、いずれの図書も障害のある子どもにとって学びやすいものであると評価されている。選定協議会においても、一般図書として適していると答申をいただいている。

一方、国語 Z番「なぞなぞのみせ」は、特別支援教育課が市独自の新規採択候補本として挙げたが、調査研究委員会では「問題文が難しく絵の情報量も多すぎる」との理由から採択に適さないとの評価が出された。選定協議会においても同様の理由から「教科書として使うのには適さない」との意見が出されたことから、新規採択候補本一覧から除外している。

継続採択候補本の選定理由は、(1)の2ページから(1)の4ページに示されている。

次に、不採択候補本として挙げられた図書の理由をご説明する。(1)の5ページをご覧いただきたい。

国語 29番の「ぐりとぐら」は所見欄には「読み聞かせには向いているが、文字の習得や語彙の拡大には結びつかない」、国語 36番「バムとケロのおかいもの」は「ハムスターの口の中から商品を出すという挿絵は、障害のある子どもが真似する危険性がある」との評価が出された。これらの所見を参考に選定協議会でも議論され、「口の中にいろいろなものを入れて真似する子どもがいるのではないか、そういう心配が拭いきれない」との理由から採択に適さないとの意見が出された。

続いて、中学部・中学校用の選定理由を述べる。(1)の6ページをご覧いただきたい。新規採択候補本9冊の選定理由である。中学部・中学校用では対象となる児童生徒を学年ではなく、理解の速さに応じてAとBの二つの段階に分けて◎○等で示している。社会で3冊、保健体育1冊、職業・家庭1冊、国語1冊、数学3冊、計9冊が新規採択候補として挙げられている。それぞれについて、所見の欄に、取り上げている内容、絵や写真などの視覚的な分かりやすさ、興味関心への工夫などの観点から教科用図書として適切である理由が記載されている。

選定協議会でも9冊いずれの図書も、新規採択候補本として適切であるとの答申が出された。

(1)の7ページ、8ページは継続採択候補本の選定理由である。

(1)の9ページをご覧いただきたい。上段の供給不能な本は、小学部・小学校用と同様の理由によるものである。下段の不採択候補本2冊について、所見欄に採択に適していないとする理由が記載されている。

保健体育 13番「わたしたちのからだ」については、「精神薄弱という表現や古い器具や薬品名が使われている」との所見が記載されている。選定協議会では「確かに精神薄弱」という古い用語が使われているが、内容的には優れている」とのご意見も出されたが、最終的には「体温計など内容的に古くなっている」などの理由から不採択候補本となった。

また、英語 Wの「ABCのえほん」は、「内容的にもの足りない」との理由から不採択候補となった。

小学校・中学校合わせて物理的に供給できない本4冊と、不採択候補本4冊、合わせて8冊は、この数年学校で使っている実績が数冊で推移していること、同様の内容の本が他にもあること、中学部・中学校の生徒は小学部・小学校用からも選ぶことができることから、不採択とした場合の影響はほとんどないものと考えられる。

最後に、この他、選定協議会で出された主な意見・要望をご報告する。

- ・継続採択候補本の中にも、挿絵や用語が一部古くなっていたり、写真が白黒で分かりにくい部分もあるが、内容は優れており、捨てがたい良い本がある。文部科学省著作の☆本も部分的に古くなっている。出版社や文部科学省に対して改訂版を出すよう、教育委員会から申し入れしてほしい。
- ・仙台市の独自本も含めて積極的に新しい本が取り入れられている。今後も、障害のある子どもたちにとって使い勝手がよくて分かりやすいもの、興味関心を引き起こすものなど、多様で多角的な視点が盛り込まれているものなどをあげてほしい。

などが出された。

教 育 長
永 広 委 員

ただ今の説明に対して、何かご質問はあるか。

(1)の1ページと(1)の6ページの一番左の欄に入っているA、Bという記号は何を意味しているのか。

特別支援教育課長

この記号は、調査研究委員会で議論をした時の分科会のグループ名であり、直接この資料とは関連のない記号である。

永 広 委 員

特に(1)の6が紛らわしくて、比較的理解が早い生徒がA、理解が遅いとBという記号を使っていて、それは多分対象というところのA、Bだと思うが、それと同じA、Bというのが一番左の欄にあるので、混乱してしまう。

特別支援教育課長

ご指摘のとおりなので、来年度以降この一番左の欄のA、B、グループ名については削除したい。

草 刈 委 員

(1)の5ページで小学校の方で適さないというご意見があった「バムとケロのおかいもの」という本について、例えば昨年度にそういった児童が真似をしてしまったというような事例はあったのか。

特別支援教育課長

そうした事例があったという報告は、受けていない。選定協議会でも、本当に食べるのかという議論になった。取り上げられている小動物のリスが物を口に含んでいる絵だが、リスと自分を置きかえて食べるのかという議論になり、中にはそういう子どももいるかもしれない、危ないことは否定できないので落としましょうという結論になった。

吉 田 委 員

今採択されている教科書で、子どもたちにとって生活に密着したような教科書も

大事だが、芸術的な感性を育てるという意味で、美術、図画工作の本はあるが、音楽はない。音なので活字や図、絵とはまた違うものということで教科書自体は載っていないと思うが、そうした理由でよろしいのか。

特別支援教育課長

一般図書については、音楽という種目の規定自体がない。音楽は他の検定本や歌集などを使って指導するだろうということで、種目自体の設定がないということである。

今野委員

通常の図書というのは1年分ずつ必要な分だけ印刷するのか、あるいは何年か使うのが分かっているならば、予測して多めに印刷するのか。教科書として適さないというものの中には、古くなってしまったというものがあるが、だいぶ以前に印刷したものを使っているのか。

特別支援教育課長

一般図書については、障害のある子どもたちの教科書として使うということは全く想定していない、いわゆる本屋で普通に売っている子ども向けの図書である。したがって、例えば表紙に「赤ちゃんのため」と記載されて売っている本もある。そうすると赤ちゃんの本を教科書として使うのかという気持ちになる子ども、保護者の方もいる。全国でどのくらいの数が売れるのか分からないが、本屋に在庫がある部分については出していくということになるので、在庫がなくなって再版・増刷の予定がない本は、後になって分かるということになる。全国の注文数を集約した結果、供給できないということが後になって分かるということが、毎年何冊かある。

宮腰委員

中学部・中学校用の英語について、絶版になった図書があり、また今年度採択された本で採択に適さないという本もあるが、英語のテキストは全くなくなってしまっているのか。不採択本に代わる教科書は、候補として挙げられていないのか。

特別支援教育課長

別紙資料3の(1)の8ページに中学部・中学校用の図書で継続して使う教科書が載っている。一番下の欄の種目として英語があり、番号26の「和英えほん」以下の7冊が継続採択候補本になっている。

草刈委員

同じ資料の8ページの数学を見ると、1冊しか候補に挙げられていない。今年度新規採択候補本として3冊挙げられているが、今年度は1冊だけで授業を行っていたと理解してよいか。

特別支援教育課長

中学部・中学校用としては今年度1冊だが、中学校の子どもたちはそれぞれの生徒の実態に応じて、もう少し易しい内容になっている小学部・小学校用の図書も使うことができる。

齋藤委員

先ほど永広委員が質問した別紙資料3の(1)の1ページと(1)の6ページについて、ここに示しているグループで分けたという説明があったが、どういうことかももう少し詳しく説明していただきたい。

特別支援教育課長

調査研究委員会では校長、専門委員会では教員の先生方において調査研究していただくが、冊数が多いので先生をいくつかのグループに分けて、その中で調査研究している。その時のグループ分けを記入しているということである。

齋藤委員

そのグループごとに見ている教科書は全部同じものなのか、それとも冊数が多いのでグループごとに分けて見ているのか。

特別支援教育課長

グループごとに分けている。中学校の先生は主に中学校の図書、小学校の先生は小学校の図書という形である。中学校の場合には、さらに教科ごとに分けていた。調査研究委員会においても、小学校の校長、中学校の校長がいるので、大きく小学校、中学校に分けて調査研究した。

齋藤委員

同じく別紙資料3の(1)の10ページについて、4つ星がついている音楽の教科書が1冊あるが、結構細かい字で書かれていると感じたが、中学校はこの1冊しかないのか。

特別支援教育課長

同じ資料の10ページの上段にある小学校用の星1つから星3つの3冊については、昨年度採択していただいた。中学校用としては、星4つの教科書と想定されて

いるが、星3つの教科書を使っても、星2つの教科書を使っても構わないことになっている。

永 広 委 員 先ほどの草刈委員の質問の続きになるが、今年度の新規採択候補本を見ると、宮城県が推薦しているものの中に社会が多く、これは地図帳の中で不採択になったものがいくつかあるので、その代替ということで多いのは理解できる。仙台市が独自に候補に挙げたものとしては、数学が目立っていて、先ほど中学校用は少ないが小学校用の図書も実際は使うので不足していたわけではないという説明であったが、数学関係のものを3冊候補として挙げているので、何かしらの明確な意図があると思うが、その意図というのは何か。

齋藤指導主事 今まで中学校数学の一般図書としては、1冊しかなかった。その1冊を選ぶと、後は選べないことになってしまうので、1冊を選んだ生徒が他の図書を選べる形にすることが選択の幅を広げることになるので、増やすという意味で今回新規採択本として3冊を挙げた。

今 野 委 員 今の質問に関連して、一般の生徒は自分で選ぶことはできないが、特別支援の生徒は何冊かの中から自分で選ぶことができるということか。先生が選んであげるのではなく、生徒が選べるということか。

特別支援教育課長 図書は生徒ではなくて、教員が選ぶことになっている。教科書センターで展示されているので、教員が1冊ずつ見て、「A君という生徒にはこれがいいかな。去年まではこれを使っていたが今度はこっちがいいかな」と一人一人の子どもについて実際に教科書を見ながら選ぶことになる。

吉 田 委 員 芸術教科の図書について、教科書の分類を見ると生活に関係するような本が多い理由は子どもたちの背景から理解できるが、子どもによっては芸術的な能力を發揮する子どももたくさんいると思う。そういう子どものための教科書ということ考えた時に、音楽は別にして、美術・図工の教科書の冊数がもう少し多くてもいいのではないか。ただ、冊数の制限があれば別だが、そういう制限はあるのか。

特別支援教育課長 冊数の制限は特にない。宮城県から示されているのはもっと少ない冊数になるが、仙台市として子どもたちにとって必要なものを独自に選んで追加している状況である。すごくいいセンスを持っていて、そうした面の力を伸ばせるといふ子どもがいると思うので、そうしたものを一般図書として検討していきたいと思う。

教 育 長 そういう意味ではきちんとリサーチすることが前提になると思う。

他に質問等はないか。中学校の教科書とは違うシステムなので、特別支援の子どもたちに対してはできるだけきめ細かい指導をするために、かなり弾力的な教科書という形になる。基本的に今説明のあった図書すべてを採択するという方向でよろしいか。

各 委 員 異議なし。

教 育 長 ご異議がないようなので、そのような方向で進めてまいりたい。

【書写】

教 育 長 事務局から補足説明があれば。

相澤指導主事 先ほどの質問に関して補足させていただく。

中学校3年生の書写の授業時数に関して、仙台市のスタンダードカリキュラムにおいては毛筆が4時間程度、硬筆が4時間程度、知識等が2時間程度と示している。

3年生で学習する部分に関しては、別添資料8のD者の教科書編集趣意書54ページに3学年の学習内容として、「1、目的に応じて書こう」で知識事項4時間、「2、学習したことを生かして書こう」で知識事項4時間、毛筆・硬筆2時間と

なっている。一方、別添資料8のE者の教科書編集趣意書9ページに3学年の学習内容として、「1、身近にある文字を調べよう」で知識事項3時間程度、「2、効果的に書こう」で知識事項4時間、「3、生活を豊かにする文字」で毛筆・硬筆3時間となっている。

教科書をすべて学び終わられるかどうかということに関して、D者は教科書編集趣意書53、54ページのとおり、標準時数ですべて指導することになっている。一方、E者は教科書編集趣意書8、9ページのとおり、配当時数が「適宜」というところが多くあり、選んで実施することを想定して構成されている。

教 育 長 先ほどいろいろご意見があった中で、事務局であらためて確認してご説明したが、今の説明について何かご質問等あるか。

今の説明を改めて理解していただいた上で、改めて再度の意見を確認したい。

永 広 委 員 今の説明の中に出てきたD者の編集趣意書54ページの最後の欄に、いろいろな書写辞典があって、その部分は時間配分が「適宜」となっていて、その中には書き初めもある。一方、E者の方は書き初めの時間を各学年2時間とっている。書き初めは、標準的な課程の中には入っていないのか。

相澤指導主事 書き初め展における指導については、学校の中で行っているが、教科書の中の書き初めについては、その教科書の趣意書にあるとおриだと思ふ。教科書内に書き初めの題材があるので、これについては時数をとって指導している。

教 育 長 そうすると、書き初め展は教科書とは全く別な扱いで、授業の書き初めについては適宜ということで理解してよいか。

相澤指導主事 書き初めについては、適宜学校が計画するところであり、書き初め展についてはその発展と捉えている。

永 広 委 員 D者は書き初めの見本は最後のページになっていて、それが書写辞典という最後の欄に入っている。これも含めて適宜と書いてあるのでこれでいいのかと。書き初めがきちんとカリキュラムの中に入っているのであればどこかで時数をとっていないか。

教 育 長 E者では1年から3年のところで各2時間をとるとなっているが、D者では適宜という扱い、この違いはどういうふうに捉えればいいのか。書き初めというのは学習指導要領ではどういう位置づけになっているのかというご質問だと思うが、そこについてお答えいただきたい。

相澤指導主事 学習指導要領には書き初めと明記されていないので、それぞれの発行者が判断して時数を割り当てていると思う。

教 育 長 現場においてはどのように判断しているのか。

相澤指導主事 今お話ししたように学習指導要領上で書き初めを必ずやるようにという記載はないので、書き初めという題材を入れる、入れないは教科書会社の判断になる。また、学校ではどうするかと言うと、それぞれの学校によって書き初めを年間指導計画の中に取り入れている学校もあるし、取り入れていない学校もある。

ただ、いずれにしても書き初めは習字なので、書き初めをやらない学校であっても習字という授業時間があるので、そのように捉えていただければよい。

永 広 委 員 教科書会社によって多少扱いの差があり、あとは学校の判断によるものだと理解した。

草 刈 委 員 行書は毛筆、楷書は硬筆という捉え方で学ぶと思っていたが、趣意書をよく確認したところ、行書でもきちんと硬筆で練習をするということになっており、D者はそれについて非常に詳しく趣意書に示している。E者の方は、毛筆と硬筆の区別があまり書いていないが、これは指導する上でそういう指示があった方がいいのか、ない方がいいのか。先生方の工夫でどのようにでもできるという捉え方でよいか。

相澤指導主事 先ほど学習指導要領の説明の際に申し上げたように、毛筆は硬筆を書くための1

つの運筆等の練習に利用すると学習指導要領に記載されている。つまり、セットで毛筆から硬筆へととなっている。行書について教科書に記載があるかどうかという部分は、記載があった方が指導しやすいことが多いと思う。

教 育 長

あらためて書写に関してどの者を採択するかということについて、何かご意見はあるか。

今 野 委 員

机の上で教科書を広げて勉強するのが基本だと思うが、書写の場合は実技がある。実技を学ぶには、書写であれば習字の先生の書き方を見れば一番いいと思う。ただ、生徒の中で習字を習っているのはどれくらいか分からないが、全員ではないと思う。そう考えてみると、学校以外で習字の先生に習っていなければ、本当に上手な方の筆さばきは見られない。スピードや上げたり下げたりするような感覚というのは写真だけでは難しいので、デジタル的に見られるということは将来的には非常に面白いような気がする。画像を見られるということは、将来にわたっても実技の場合プラスになると思うので、私はそのままのD者である。

教 育 長

デジタルコンテンツのお話があったが、通級教室などで筆順が分かるようなソフトを使っていることが一部あるが、そういうものは今後もあくまで補助的に使うようになっていくと思う。筆のさばき方などのソフトは出てくるかもしれない。そうした点の活用については、何か情報として持っているのか。

教育指導課長

書写に限って言えば、今のところそういう話を聞いたことはないが、今野委員がおっしゃったようにデジタルコンテンツで実際動いているものを見られるということは、非常に指導する上で、あるいは子どもたちが学ぶ上でもかなりプラスになると考えている。

草 刈 委 員

どうしても細かいところを比べるようになるが、2つを並べて最初のページを見た時に、D者の方が文字ということを出して、小学校から中学校に上がった子どもにメッセージをしっかりと伝えてくれている。また、ページをめくって見た時に、どう学んでいけばいいのか分かりやすいのは、D者の方だと思う。

3年生の単元を比べると、同じように今までの学習をまとめて記載しようということで、2者ともに同じような形でまとめられているが、裏表紙を見た時にD者の方は言葉として手書きの力を入れて文字を前面に出している。それに対してE者は物をしっかりとした写真として写しており、文字ということ考えた時に私はD者の方がどうしてもいいということを再認識した。

吉 田 委 員

私は3学年の編集のありようについて判断してきた。先ほど趣意書の話も聞き、また仙台市版スタンダードカリキュラムについても触れていただいた。書くことを中心にして選んでいくということで、3年生の10時間のあり方で、D者の場合はどちらかと言うと知識理解が中心になっているが、それはまとめを中心にしたためにそうなったと思う。私はもう少し書く場面、表現の場面があっていいという考え方でE者ということにしていたが、D者の場合は引き続き資料編に行くようになっていると考えた時に、私がいいなと思っていた1年生、2年生の充実を生かす意味で3年生になった時の適宜という項目を活かし、資料編の活用という結びつきで考えていけば、いいと思っている1年生、2年生も生きてくると解釈した。

今、E者からD者に判断が変わろうとしているわけだが、そういう意味でスタンダードカリキュラムに基づいて教科書を使う先生方の解釈と活用に委ねるという意味でD者もいいという解釈の変更をしたところである、

教 育 長

E者というご意見だったが、今事務局の説明と皆さんのご意見等も聞いてあらためてD者に変更するという意見である。3年生の活用については、E者の使い方もあると理解してよいか。

吉 田 委 員

活用のあり方で、適宜資料編を上手に活用することによって表現という場面も保障できるという判断である。

永 広 委 員

どうしても言いたいことは最初に言ったので細かい話になるが、教科書を開いた表紙裏のイメージはたしかにD者の方が優れているが、ページをめくると目次の後にE者の方は「学習の初めに」というページがあり、ここで書写というものとして3年間で何をやるかということがきちんとまとめられている。この点はE者の方が優れていると思う。

筆使いについては、D者は6ページ、7ページに、E者は12ページ、13ページに記載されている。齋藤委員から勢いよく書かなければいけないという意見があり、もちろん毛筆では勢いというのは特に重要だが、最初にどういう筆使いにすればいいのか学習するという意味では、E者の方が説明は丁寧である。よく見ると筆の先はこちら側に来るなど書いている。D者もそうした表現としてオレンジ色は筆先、薄い色は根元の部分ということで使い分けられていると思うが、説明がない。E者の方もそうした説明はないが、先がどこに行き、どこで止めてということがきちんと説明されており、一人で見直して一人で学習していくという意味ではE者の方が分かりやすい。

それからもう1つ、E者の最後の織り込みのところで書き初めの例の後に、春夏秋冬のきれいな写真とともに、その春夏秋冬に関わる季節の呼び名やその季節を表すいろいろな言葉の例を入れていて、こういう点は後でもいろいろ使える。季節感というのは大事なので、こういうところはE者が優れている。

ただ、これはあまり決定打ではないので、E者の方がいいという最初の判断を変えるところまでは至っていない。

宮 腰 委 員

いずれも3年間で50時間という中できちんと字を覚える、また、応用編ということで、実際の生活で手紙を書いたり、あるいはいろいろな書を書いたりということがあがるが、かなりの部分はインターネットでも学べる。限られた時間の中で学ぶということになると、きちんとした字を先生の指導のもとで中学校の3年間で習得することになる。

そういう意味では、D者はそういう点で非常に無駄がなく、しかも楷書から入って順序立てた説明もされており、きちんとした楷書、行書、仮名、またいろはも最後にある。また、手書きというものが本当に少なくなってきた時代において、手書きの力というのはこういうことだという非常に優れた言葉をコラムに挙げている。

そういう意味で、まさに書写に徹している教科書と判断する。非常に無駄のない、きちんとした文字の力というものを子どもたちに理解させようとしており、私はD者が非常に優れていると考えている。

教 育 長

基本的にはD者ということで変わりはない。

齋藤委員、先ほど質問等あったが、ご意見としてはあらためていかがか。

齋 藤 委 員

D者に変わりない。細かく見ていくと、先ほども申し上げたが、毛筆と硬筆を両方見ていくということを考えると、D者であれば楷書も行書も字画、筆使いをきちんと示している。14ページの楷書、42ページの行書をよく見ると楷書と行書の違い、また、これは毛筆とは違う形で見えていくこともできるということで、私はこのあたりを評価したいと思う。

非常に細かいことだが、E者の42ページに封書の宛名書きがある。文字は中央に書いているが、宛先の方が住所よりも下になっている。私は住所と同じか、あるいは住所より上に書くべきだと思っているので、そのあたりに疑問を感じる。

永広委員からE者の巻末の春夏秋冬の絵が非常にすばらしいという意見があり、私もたしかにそう思ったが、例えばD者の60ページに時候の挨拶という形で非常にすぐに使える言葉という形で書いてあり、これは資料として使うべきところで大事な部分だと考えているので、気持ちは変わらずD者を推したい。

- 教 育 長 いろいろ皆様のご意見の確認をさせていただいた。選定協議会からは同じくE者、D者の推薦があった。調査研究委員会では特にE者とD者について調査結果として特徴的なものがあるのかどうか、事務局から説明願いたい。
- 相澤指導主事 これまでも部分的にお話ししたが、調査研究委員会では生徒側の視点、教員側の視点に立ったさまざまな議論が行われた。
- E者については、鉛筆の持ち方の具体的事例の写真つきでの掲載、視覚的に理解できるように工夫されていることや人名用漢字が掲載されていること、行書に初めて取り組む生徒でも抵抗なく取り組めるという意見があった。
- D者については、学習内容を書き込み欄やなぞり書きの部分が充実して非常に配慮されているという意見があった。
- 教 育 長 さらに話を深めていきたいが、今までの協議の中でも一番白熱した議論が行われている。かなり細かい部分の話も出てきており、どちらも甲乙つけがたいというところなので、一定程度このあたりで整理していく必要があると認識している。
- あらためて整理すると、永広委員、今野委員はE者で、吉田委員はE者、その後D者というお話もあったので、ある意味でどちらも可というようなご意見と受けとめる。そして、宮腰委員、草刈委員、齋藤委員はあらためてD者というご意見だった。どちらかに決めざるを得ないというところを考えると、今の状況からすると考えようによっては、D者が4名、E者が2名とともとれるので、私があえてこちらにしますと言う前に、今の状況を踏まえるとD者という声が若干強いという見方をさせていただきたいと思う。どちらにもいい点があるという中で、D者ということでもとめたいと思うが、いかがか。
- 永 広 委 員 とにかくまとめなくてはいけないので、やむを得ないと思う。
- 最後にもう一言だけ意見を申し上げたい。先ほど齋藤委員から時候の挨拶ではD者が優れているという意見があったが、実はE者も78ページにきちんと例を挙げている。例という意味では明らかにページ数の多い分だけいいところがたくさんあり、そういう意味で使いこなせればE者の方が私は教科書としては優れていると思うが、D者が悪いというわけではない。最終的にはいずれの教科書にせよ、書写を指導する先生の力量にかかっていると思う。1者に決めざるを得ないということなので、今のところ意見の多いD者でも結構である。
- 今 野 委 員 書写本来の意味から考えるとD者で全く問題ない。
- 教 育 長 いろいろ活発な協議の末、一定の結論に至るためにご理解とご協力をいただいた。そういう意味で、今回書写に関してはD者という形で協議をまとめさせていただき、31日に付議ということでもよろしいか。
- 各 委 員 異議なし。
- 教 育 長 それでは、書写に関してはD者ということでもとめてさせていただく。

4 閉 会 午後6時42分

ABC対応表

国語	A	東京書籍
	B	学校図書
	C	三省堂
	D	教育出版
	E	光村図書

国語 (書写)	E	東京書籍
	A	学校図書
	B	三省堂
	C	教育出版
	D	光村図書

社会 (地理)	C	東京書籍
	D	教育出版
	A	帝国書院
	B	日文

社会 (歴史)	F	東京書籍
	G	教育出版
	H	清水書院
	A	帝国書院
	B	日文
	C	自由社
	D	育鵬社
	E	学び舎

社会 (公民)	D	東京書籍
	E	教育出版
	F	清水書院
	G	帝国書院
	A	日文
	B	自由社
	C	育鵬社

社会 (地図)	B	東京書籍
	A	帝国書院

数学	A	東京書籍
	B	大日本図書
	C	学校図書
	D	教育出版
	E	啓林館
	F	数研出版
	G	日文

理科	E	東京書籍
	A	大日本図書
	B	学校図書
	C	教育出版
	D	啓林館

音楽 (一般)	B	教育出版
	A	教育芸術社

音楽 (器楽)	A	教育出版
	B	教育芸術社

美術	C	開隆堂
	A	光村図書
	B	日文

技術	A	東京書籍
	B	教育図書
	C	開隆堂

英語	E	東京書籍
	F	開隆堂
	A	学校図書
	B	三省堂
	C	教育出版
D	光村図書	

保健体 育	C	東京書籍
	D	大日本図書
	A	大修館書店
	B	学研

家庭	C	東京書籍
	A	教育図書
	B	開隆堂